

# 『薫風の丘』

著作 a s h

※この話は『kanon』を元にした二次創作です。

日曜の午後。

空はすっきりと晴れ渡り、五月のさわやかな風がゆつくりとカーテンを揺らしている。

どこかに出かけるにはちょうどいい日和だけど、俺は自分の部屋で読書にふけていた。自分のことながら珍しい…とは思う。でも、その本のタイトルは俺の興味と購買欲を刺激するのに十分だったと言うわけだ。

何気なく買ってしまったのは、『ものみの狐』と言う本。

俺や天野以外にもあの狐たちの本当のことを知ってる人がいるのか…そんな思いで手にして、家に帰ってからずっと読みふけてはいたものの、その中身は要するにここに伝わっている民間伝承をまとめたものだった。

パタン…と本を閉じて、大きく伸びをする。

「やれやれ…つと、…これで二千円は高かったな」

何だかんだと言いつつ俺でも一気に短時間で読めてしまう内容で、これと言って目を引くような話もない…簡単に言ってしまうえば期待はずれだったのだが、この本は二千円もしたんだぞ、二千円も。

『薫風の丘』

そもそも、真琴の勉強のために中学生用の問題集を買いに行ったはずなのに、こんなのが目に入ってしまったのが間違いだっただ。

これを買って帰った時点で、肝心の問題集を買っていなかったことを思い出し、真琴にからかわれながらまた本屋に行ったりしたしな…。

「こんなの読んでも、あまり意味はないか…」

閉じた本をボンと無造作に机に置くと、俺は真琴の勉強の様子でも見ようかと思いついて、ドアの方に歩き出した。

と、その時。

「あれ、祐一出かけるの？」

そこにちょうどドアを開けて、真琴が顔を見せた。

「いや、お前の様子でも見ようかなと」

俺がその行動の目的を簡潔に告げると、真琴の返事は早かった。

「順調よっ」

だが、その割には顔が笑っていない。

「本当にやってるのか？」

「やってるわよっ」

「そうか、それならいいけど。で、お前は何か用なのか？」

真琴の表情に胡散臭さを感じつつも、俺はひとまず信用してるフリをすることにして、真琴の方の用件を尋ねた。すると、真琴は今度は本当に嬉しそうに笑ってみせる。

「うん、秋子さんがお茶を入れてくれたから、祐一もどうかって」

『薫風の丘』

嬉しそうな真琴を見て、思わず俺は苦笑をしてしまった。秋子さんがお茶を入れてくれたからって……つまりは、かなり前から真琴は階下で秋子さんと一緒にいたわけだ。

「……って、お前勉強してたんじゃなかったのか。俺がせっかく問題集を買ってきたって言うのによ」

「気分転換ようっ」

「はあ、左様ですか……。こりやまたずいぶんと余裕綽々ですな、真琴さん」

「何よう……ここんところずっと祐一が監視してたから、たまにはゆっくりしてもいいじゃない……」

「監視じゃなくて、勉強を教えてたんだ」

「でも、廊下とか玄関で真琴のことを見張ってたじゃない……」

「お前が逃げようとするからだ」

「逃げるんじゃない……気分転換よ……」

相変わらず上目遣いに反論しているが、その気分転換とやらの時間がとつてもなく長くて、放っておくと気分転換の合間にちよつとだけ勉強をすると言う本末転倒な状態になっていたりするのだ。

そんな調子ではいつまでたつても真琴と高校に一緒に行けやしないじゃないか……って俺が……じゃなくて、天野が残念がるだろ？

「俺が言ったことをちゃんとやってからにしろって」

「あう……そんなこと言っても……」

なおも上目遣いのまんま真琴は反論するが、これ以上はただイジメてるだけのようない

『薫風の丘』

がしてしまうのは、その態度のせいだろうか…。

「ま、確かにあんまりきつくしてもしょうがないし、せっかく秋子さんがお茶に誘ってくれているんだから、今回は特別に許すけどな」

と言った途端、真琴の表情はパーっと明るくなった。…やっぱり単純なやつだよな、こいつは。

「あははっ、祐一も分かっているじゃないっ」

「…あまり調子に乗んなよ？」

ちよっとだけ釘をさすつもりでそう言うと、真琴はすぐに表情をムツとさせて、見事なくらいに大げさに反応した。

「何よう、祐一だって偉そうに真琴のことを言える立場じゃないんでしょ！」

少なくとも現役の高校生であると言うだけで、真琴に対しては偉そうなことが言える立場だとは思う。しかしまあ、ここでこれ以上真琴と言いつけてもしょうがない。そんなことよりも秋子さんを待たせるのはよくないしな。

「とにかく、秋子さんのところに行くぞ」

まだ何か言いたそうにする真琴に構わず、俺はとっとと自分の部屋から出ていった。

と、すぐに真琴の声と、バタバタと言う足音が続く。

「あっ、こら、祐一！」

この際、真琴は無視して、とっとと階下に行くに限る。真琴も秋子さんの前じゃ俺を怒鳴ったりはしないだろうからな。

そして、一階に行ってみると、なるほど確かに紅茶のいい香りが台所の方から漂ってき

た。

「今日は紅茶ですか」

テーブルに茶器を並べていた秋子さんに向かって言うと、秋子さんは笑顔でそれに答えてくれる。

「ええ。知り合いからおいしい紅茶を頂いたから」

「紅茶には詳しくないけど、確かにいい香りですね」

別に俺は紅茶通ではないし、妙に食通ぶるつもりもない。だけど、いい香りがすることは間違いないと思うし、何よりも「おいしい紅茶」と言う秋子さんの笑顔が一番の説得力を持っていた。

と言う具合に、俺がその雰囲気心地よさを感じているところに、真琴の聲が容赦なく届いた。

「祐一には紅茶のおいしさなんて分からないんじゃないの？」

…人がせっかくいい気分浸っていると言うのに、それを容赦なくぶちこわすなんて、まさにガキのすることだ。

「ふん、人がせっかくいい気分だったのを、何のためらいもなく土足で踏みこむような真似をしてるやつに言われたくはないな」

「うーっ…何よう、それ」

ちょっと俺も大人げなく真琴に対抗してしまったが、まあ真琴にはよく分からないことだろうし、そもそもこんなことをしに来たんじゃない。

「ま、細かいことはいいから、せっかく秋子さんがおいしい紅茶をどうぞって言ってくれ

『薫風の丘』

てんだから、それを頂くとしようぜ？」

「あうー…何だか騙された気分がする…」

騙された気分とまで言われてしまっただけ釈然としないが、俺がそれ以上気にする必要はないだろう。さすがに秋子さんの手前もあるしな。

と、何気なく俺が秋子さんの方に視線を向けると、秋子さんとちょうど目が合ってしまった。

「そうそう、祐一さんはどう飲みますか？」

どう飲むって訊かれて、カップで…とか、口で…とか言うようなボケをしている場合じゃない。秋子さんがそんな冗談を言ってるわけはないんだ。要するに紅茶に砂糖とかミルクとか入れるかって訊いてるんだよな。

「あ、俺はそのままでもいいです」

ストレートでいいと言う意味で俺が答えると、秋子さんは少しだけ困ったように笑った。「あら…ポットのまま飲むんですか？」

「え……」

その瞬間、俺の表情は固まってしまった。

別に秋子さんが冗談を言ってるようには思えなかったのだが…と、俺が固まったまましていると、秋子さんはくすりと笑いながら、短く言った。

「冗談よ。祐一さんはストレートでいいのね？」

…どうして、こんな風にはずしたボケができるんだろう……。

まあ、こんなことができるからこそ、秋子さんの年齢がいつまでたっても不詳のままな

『薫風の丘』

んだろうな……納得。

とにかく気を取り直して、素直に紅茶を頂くとしようじゃないか……と、俺が椅子に座ると、そう言えばこの場に名雪の姿がないことに気がついた。

「あれ、名雪は？」

俺が周りを見回すようにしながら誰ともなしに訊くと、真琴がそれに短く答えてくれた。「名雪さんは部活だった」

ああ、そう言えば……今朝そんなことを言ってたな。「日曜だったのに、忙しいことだな」って俺が言ったら、「うん、でもわたし部長さんだから、頑張らないとっ」てのんきに笑っていたっけな。

そう言えば、だな……。

今さら言うことでもないんだが、名雪のことは「名雪さん」なのに、俺のことは「祐一」と呼ぶんだよな……こいつは。まあ、天野の時みたいに「名雪ちゃん」と呼ぶにはかなり抵抗はあるだろうし、最初っから俺のことは呼び捨てだったし、それはそれでいいんだけど……。

まあ、いいか。今はひとまず、おいしい紅茶を堪能するとしよう。

「この紅茶おいしいっ！」

横ではすでに真琴が満面の笑みとともに、実に分かりやすい感想を述べているし、俺も一口……。

へえ……思ったよりも渋くない……どころか、かすかに甘みを感じるくらいだぞ。どこの誰にももらったのか知らないけど、これは確かにおいしい紅茶だ。

『薫風の丘』

「うん、本当においしいですよ、これ」

「それはよかったわ。お茶菓子もあるから、食べてくださいね」

「うんっ！」

「名雪にも飲ませてやりたいですね」

「茶葉はまだあるから、今度はあの子もいる時に入れましょうね」

いきさつはともかくとして、たまにはこんな風にお茶を楽しむってのも悪くないかも知れないな。

穏やかな気分になれるって言うかな。ここんところ、真琴にもちよつと厳しすぎたかも知れないな……なんて、思えてくるし。

と俺が真琴の方を眺めていると、真琴が思い出したように俺の方を向いた。

「ねえねえ、祐一」

「何だよ」

すでに空になったカップを皿に戻して俺が短く訊き返すと、真琴はほんの少しだけためらいがちに尋ねてきた。

「あの……さっき、祐一の机の上にあった……」

「机の上？」

「うん……あの本って……祐一の本？」

俺には真琴が何を言いたいのか、よく分からなかった。と言うより、真琴自身にしても、どう訊いたらいいのか分かってない感じだな。

「お前、何を言いたいんだ？」



『薫風の丘』

「あうー…だから…あの本が…祐一の本なのかって…」

俺が訊き返しても、困った顔で同じ質問を繰り返すだけだが、俺をからかっているような表情ではない。

「俺の本って言えばそうだぞ。さっき買ってきたんだからな」

一応はそれではない答えを言ったつもりだったが、やっぱりと言うべきか真琴は全然納得していないようだ。

「ううん、そうじゃなくて…あうー…何て言うのかな…」

一体何が言いたいんだろうか…と、俺はさっぱりわけが分からない状態だったが、そこへ秋子さんが助け船よろしく真琴に声をかけてくれた。

「真琴は誰が書いた本なのかって訊きたいの？」

あ、なるほど。

真琴のことだから著者とか筆者なんて言う言葉は出てこなくても無理はないしな。いや、さすが秋子さんだ。

と、俺が一人で納得していると、真琴は困ったように首を横に振って、秋子さんの言葉を否定した。

「そう…かも知れないけど、そうじゃないかも…知れない…」

「何じゃそりゃ！ さっぱりワケが分からんじゃないか」

勝手に納得していた答えをあつさり否定されて、思わず俺は声を上げてしまった。俺の声に一瞬ビクツと体をふるわせたものの、それで真琴がおとなしく引き下がったりはしない。

『薫風の丘』

「でも、真琴にもよく分からないんだからしょうがないじゃない…」

「祐一さん」

すると今度は、困ったように笑う秋子さんに、俺が釘をさされてしまった。

「あ、すみません…」

俺が小さく謝ると、秋子さんは真琴に向き直って、

「それで、何が気になったの？」

と、今度は子どもをあやすように優しく問いかけた。確かにここは秋子さんに任せた方がよさそうだな。

「…よく分からないけど…祐一の机の上にあった本から…」

「本から？」

「…懐かしい…匂いって言うか…そんなのがして…」

その時の真琴の表情は、自信なさげではあるが確かに真剣なものだった。だが、その「懐かしい匂い」と言うのには、少なくとも俺はかなり怪訝な表情をしてしまった。

「匂いって言うても、あの本は今日買ってきたばかりで、別にどこも変な感じはないけどな…」

「祐一さん、その本のタイトルと書いた人って分かりますか？」

タイトルはともかくとして、著者と言っても…すっかり期待はずれだった内容にがっかりしたおかげで全然意識していなかったな…。

「持ってきた方が早そうですね」

その場でタイトルぐらいは答えてもよかったかも知れないが、どのみち著者の名前が出

『薫風の丘』

てこないのだ（そもそも一人だったのか、複数だったのかも覚えてないくらいだ）から、  
実物を持ってきた方が話が早い。

「ごめんなさいね」

秋子さんの返事を受けて、俺はすぐに席を立つ。

その時、かたわらに座ったままの真琴に視線が向いたが、真琴はばつが悪そうにうつむいて黙っているだけだった。

やれやれ……。

あの本に何があるって言うんだ？

そりゃ確かにあれは……真琴にとっちゃ切っても切れない話には違いないが、それにしては気にしすぎだ。

何とも言えない胸騒ぎのようなものを感じつつ、俺は自分の部屋に戻って目的の本を片手に取って、すぐに一階へと引き返す。

食堂に戻ると、俺が上がった時とほとんど変化のない二人の姿があった。その雰囲気から察すると、特に話も進んではないようだ。

「秋子さん、これですよ」

俺は自分の席に着きながら、秋子さんに持っていた本を手渡す。と、その時真琴が目だけで、その本を追っていた。

「あら、この本って……」

俺から本を受け取るなり、秋子さんはすぐに何か分かったような表情を見せた。と言つても、本当に何かが分かったのかどうかは……別問題だけだな。

『薫風の丘』

俺が視線を秋子さんに向けると、秋子さんは真琴の方を少しだけ見てから、また俺に向かって小さくうなずいてくれた。秋子さんのことだから、俺がどうしてこの本を買ったのかなんてことを、すぐに分かってくれたんだろう。

「真琴はこの本のこと…何か覚えてるの？」

優しく微笑みながら、秋子さんは真琴にそう尋ねた。  
なるほど。

真琴は自分の素性を覚えてないんだから、記憶の手がかりがあるのかって言う解釈で話せばいいわけだ。

だが、真琴の反応は芳しくない。

「うー…よく分からない…」

「どこかでこの本を見たのかしら？」

「それも…覚えてない……」

見た覚えもないし、それ以外の何かを覚えてると言うわけでもない。真琴がそう答える限り、それ以上の追及は意味がなさそうだ…俺はそう思っていたが、真琴はまだまだ真剣なまなざしだった。

「さつき、匂いはどうとか言っただけじゃないか、お前」

あまり意味はないかも知れないと思いつながら、俺は真琴に向かって言葉を発した。すると、真琴はおもむろに顔を上げて、改めて本をじっと見つめた。

「うん…やっぱり懐かしい感じが……する…」

そう言いながら、真琴自身も自分の言葉に戸惑いを感じているのが、よく分かった。そ

『薫風の丘』

れは確かに無理もないだろう。

記憶喪失のはずなのに、覚えてない本に「懐かしい感じがする」なんて言ったら、俺が真琴の立場でも自分の感覚に疑問を感じるどころだ。

…って、待てよ。

真琴が「懐かしい感じがする」なんて言うのは……いや、まさか……そんなはずがあるわけじゃないか……。

でも、こいつが失っている記憶ってのは……一月の頃の記憶と……狐の頃の記憶しかないじゃないか……。

いやいや、いくら何でも、狐の頃なんて……覚えてないはずだし……。

じゃあ、何で「懐かしい感じがする」んだ？

「…祐一？」

「ん？ ああ、何だよ？」

「どうかしたの？」

「お前が変なことを言い出すから、ちよつと言葉に詰まっただけだ」

「真琴、変なことなんて言っていないわよう……だって、本当にそう思ったんだからあ……どこか不安げに答える真琴。」

いや、確かにここで俺が変に考え込んだりするの、かえって真琴を不安にさせるだけだな。今さら真琴が不安がることなんて、一つもないはずなのに。

「大丈夫だって」

俺はそう言うと同時に、ポンと真琴の頭の上に手を乗せた。そんな俺の行動が意外だっ

たのか、わずかに真琴は不思議そうな表情を見せたが、乗せた手をどけようとはしなかった。

真琴が嫌がってるわけじゃないことを理解すると、俺は乗せた手をゆっくりと動かしながら、さらに言葉を続けた。

「お前が不安がることは何一つありやしねえって。もし、そんなのがあったとしても、俺が粉々に砕いてやるって」

さすがにそこまで言うのはこっぴどくしかかったが、時にはそう言うことをはつきりと口にしてやらないといけないと思う。何と言っても真琴は寂しがり屋の甘えん坊のくせに、俺に対しては強がってみせるからな。

「そうね、祐一さんがいるから、真琴は何も心配することないわよね」

「あー……祐一がいるから、心配なのよ……」

秋子さんの肯定には俺もちよつと照れ臭かったし、真琴も控えめながらそれに反論をするくらいの気概はあったらしい。だが、相変わらず俺の手をどけようとはしなかったのが、何と言うか真琴らしいよな。

日頃からこれぐらい素直で可愛かったら……って、それは真琴じゃないじゃないか。日頃は小憎らしい態度を見せるからこそ……って、一体俺は何を力説してんだか……。

と、まあ、それはさておき。

実際のところ、真琴とこの本の関係ってのは何かありそうだ。それがどんなものなのかは今の時点はさっぱり分からないのだが、どっちにしても、この本のことには調べる必要がありそうだ。

『薫風の丘』

ただ調べると言ってもいきなり出版社に問い合わせるのもなあ……。この本の著者だつて……っと、そう言えば、著者の名前なんかも全然確認してなかったな。

「秋子さん、ちょっと本いいですか？」

「はい、どうぞ」

今さらながらとは思いつつ、俺は片手を真琴の頭に置いたまま、もう片方の手で秋子さんから本を受け取った。

そして、すぐに著者と出版社を確認しようと、本をぐるりと見回した。

著者の名前は……高木隆太郎、出版社は……水の星舎か……と、俺がその名前を覚えようとしていた時だった。

「その本を書いた人に会ってみる？」

秋子さんがいつもと変わらぬ笑顔のまま、そんなことを突然言い出した。

「は？」

真っ先に俺の口から出たのは、それだけだった。

と言うのも、秋子さんの提案が全然脈絡がない上に突拍子もなかったのだから、しょうがない。脈絡がないのはいつもと同じだとしても、いきなり「会ってみる？」と言うのはよく分からないじゃないか。

「祐一？」

それまで俺の手をおとなしく乗せたままだった真琴も、気がついたように俺の手をすつと自分の前に下ろして、俺の方を怪訝そうに見つめている。

「いや、だって、秋子さんがいきなり……」

『薫風の丘』

突拍子もないことを言い出したから驚いた……と俺が続けて言うよりも先に、秋子さんがべこりと頭を少し前に倒して、謝ってくれた。

「ちよつと説明が足りなかったわね、ごめんなさい」

謝るほどのことじゃないけど、確かに説明は足りなかったと思う。が、今はそんなことをとやかく言ってる場合じゃない。

「いえ、そんな……。でも、どうしてです？」

「実はその出版社……水の星舎（ほし）には、知り合いがいるんですよ。だから、その人に訊いてみれば、高木隆太郎さんのことも分かりますよ」

出版社に知り合い……とは、さすがに秋子さんだなと思う。でも、知り合いと言っても上から下まで色々あるしな……。

「失礼だとは思うんですけど、その秋子さんの知り合いって……どのくらいの人なんですか？」

「知り合いと言ったら、知り合いですよ」

「や……そうじゃなくて……出版社の中でも、そんな風に作家との仲介なんかできる立場の人なんですか？」

「ええ、それは大丈夫だと思います。そんなに大きくない出版社ですから」

ちよつと秋子さんの言葉の意味がつかめないけど、要するに作家との連絡くらいはとれる人物と言うことだ。それにしても、秋子さんの人脈はよく分からないところにまであるんだな。

「でも、もし会えると言う話であっても、真琴一人で行かすわけには……」



『薫風の丘』

「もちろん祐一さんが一緒に行つてあげるんでしょ？」  
う…。

そりゃ確かに実際に行くとなつたら、俺が一緒に行くつもりだったのは間違いないが…  
こうもあつさりと読まれてしまうと、何か格好悪いな。そもそも、そんな風に言っちゃつたら、真琴のやつもギャーギャーと…。

あれ？

何も言つてこない？

そんな馬鹿なっ！

と、俺があわてて真琴の方を見ると、真琴は何だか複雑な表情をしていた。

「どうしたんだよ、お前…」

あわてて真琴の方を見た自分のことは棚に上げて、俺がそう尋ねると真琴はすぐさま困つたような表情になつた。

「あうーっ」

「何困つてんだよ？」

「よく分からないの…」

「何がだよ」

短いやり取りの後、不意に真琴がうつむいてしまう。それでいて、目だけは俺の方を向いていた。

「…その人に…会いたいような…でも…」

その人つてのはこの本の著者、高木隆太郎のことだろう。それにしても、この人見知り

の激しい真琴が「会いたいような」と言うとは…正直言って俺は驚いた。と、同時に「でも…」に続く言葉も理解できた。

でも、会うのが怖い…とか、会いたくないような気もする…って言いたかったんだろう。「怖いのか？」

俺が短く訊くと、真琴はほんの少しだけビクツとして、また俺の方を不安げに見つめるだけだった。

確かに、自分の記憶がない状態で、自分のことを何か知ってそんな人に会うのは怖いだろう。その人が本当に何かを知ってるのかどうかもまだ分かってないのに、本当に何かを知っていたら…と思うと、俺だつてためらってしまうに決まってる。

「安心しろって…と、俺が言っても当てにはならないかも知れないけどな」

俺は自分の手を真琴の頭にボンと乗せ直しながら、そう言った。今の真琴にとって、それが大した意味はないかも知れないと思いつつ。

すると、真琴は自分の手を頭を持っていた。さすがに今度は俺の手をどけようと言うつもりなんだろう…と俺は思っていた。

「そんなこと…ないよ。祐一の手…おつきくて…あったかいもの…」

…えっ？

今の真琴の言葉に、思わず俺は自分で真琴の頭にあつた手を引っ込めてしまった。俺の手を押さえようとしていた、真琴の手をすり抜けて…。

「あっ…」

そこに残ったのは自分で自分の頭に手を置いた真琴と、いきなり引っ込めた手のやり場

に困る俺だった。つくづく自分でも間が悪いとは思う。が、真琴の言動が俺の予想外だったのも確かだ。

こうなれば、後は秋子さんにこの場を任せるしかない……と言う俺の無言のお願いを感じ取ってくれたのか、はたまた単純にそう思ったただけなのか、秋子さんは気まずい雰囲気俺と真琴に向かって、笑顔で言った。

「紅茶のおかわりはいいですか？」

すると、すかさず真琴が秋子さんに負けない笑顔で答えていた。

「あつ、真琴もう一杯欲しいっ」

……………

何て言うか、俺と真琴の間の気まずい空気なんて、秋子さんのマイペース笑顔一発で吹き飛んでしまった。いやまあ、真琴の単純思考もこの際考慮に入れておく必要があったな……。とにかく、この場はそれで収まったのだから、よしとしておこう。

結局俺ももう一杯おかわりをもらってから、話は『ものみの狐』と言う本とその著者高木隆太郎の方に戻ったのだが、それまでのおよそ二十分くらいは紅茶の話など、全然関係ない話題が続いていたのだ。

「高木隆太郎さんの方は、水の屋舎（まじ）の方に会えるかどうか訊いてみればいいですよね」

「ええ、そうですね。で、もし会えないなら、せめて連絡方法だけでも教えてもらえれば……」

そう簡単に作家に会えるものなのか、俺にはよく分からなかったので、控えめにそう提案すると、秋子さんはやっぱり笑顔で答えてくれた。

『薫風の丘』

「大丈夫だと思いますよ」

うーむ…どうしてこれだけ言い切れるんだろう……。でもまあ、秋子さんが大丈夫と言うなら、何があっても大丈夫なんだろう、きつと。

「それじゃ、後は…俺が行ける時間帯で…って、そもそもその人って、どこにいるんですか？」

いきなり遠いところに会いに行く…なんて話になったら、現実問題として行けるかどうか分からない。ふと、そんな実在に初歩的な問題に気がついたが、それでも秋子さんの様子は変わらない。

「それも大丈夫ですよ、きつと」

さすがにそこまで言い切られると、少しだけ心配になってくるが…まあ、秋子さんに任せただから……。…（たとえ遠隔地だったとしても）どうにかなるに違いない……。…たぶん。

「そうですか…。それじゃ、そっちの方は秋子さん、お願いしますね」

「ええ」

と、こんな風に話がまとまったところで、お茶会はお開きとなった。

俺は件の本を手にして、そのまま自分の部屋に戻るつもりで、食堂を後にすると、ふと背中を何かが引っ張る感じがあった。

「祐一、その本…」

振り向くと真琴が立っていたが、どうにも所在なげにうつむいたままそれだけ言うど、黙ってしまう。

『薫風の丘』

「読みたいのか？」

俺が訊くと、真琴は小さくうなずいた。

真琴がこの本に興味を抱くのは当然だと思う。だけど、この本を今の真琴に読ませていか悪いのか…となると正直な話、俺は読ませたくない。

「でも、俺もまだあんまり読んじやいないんだ。お前には悪いけど、まずは俺が読んでからにしてくれないか？」

すでに一読はしたのだから、はつきり言ってしまうはそれはウソになる。だから、真琴は納得しないだろうなと思っていたのだが、それは完全にはずれな予想だった。

「それじゃ、祐一が読み終わったら、真琴にも貸してくれる？」

「ああ、お前がちゃんとやることをやったらな」

ここで言うやるとは、勉強以外の何物でもない。ちよつと意地が悪い言い方だなとは思ったが、勉強だって今の真琴には必要なことなのだ。

「あー…それじゃ勉強する…」

あの真琴がこんな風にすんなり言うことを聞くなんて……。かなり釈然としないのだが、これはこれでいいことのはずだと…思う。

「ああ、さっきの問題集、ちゃんとやつとけよ」

「うん…」

がっくりと肩を落としている真琴を見ると、何だかこっちが悪いことをしてるような気がするが、まあしょうがない。

俺は真琴が自分の部屋に入るのを見届けた後、自分の部屋に戻ってベッドにごろんと横

『薫風の丘』

になった。

横になったまま、本を開いてみる…が、別に真剣に読んでるわけじゃない。

何で真琴がこの本を…この本の著者を気にするんだろうか…そんなことばかりを考えていたのだ。

それにしても、さっきのお茶会の席で真琴が言ったことも気になる。

『そんなこと…ないよ。祐一の手…おつきくて…あつたかいもの…』

なんて、真琴が言うなんて…。

…と、そうだ。

今まで俺はあまり意識したことはなかったけど、狐の頃はよく真琴の頭を撫でてやっ  
たっけ。そうすると真琴のやつも嬉しそうにしてたもんだから、つい調子に乗って…。

もしかしたら、真琴は狐の頃の記憶とか…ほんの少しだけ持つてるのかも知れないな…。  
とすると、この高木隆太郎とも何かあっても…不思議はないってことになるのか？

…何かって、何だよ？

ま、よく分からないことだらけだけど…一つだけ言えるのは、今ここで俺が悩んでも  
意味がないって言うか、悩む必要なんてないよな、やっぱり。すべては、この高木隆太郎  
に会えば分かることだし。

結局のところ、俺にできることもやらなきゃいけないことも限られている。

今の俺にできること…それは、真琴が気にするようなことがあるのかを確かめることだ。  
それから、俺は体を起こして、ベッドに座ったままもう一度『ものみの狐』を読み始め  
た。

『薫風の丘』

……それから、数時間後。

念のためにと読み直してみても、やっぱりこの本に書かれているのはよくある昔話のたぐいでしかない……それが俺の結論だった。それが本当にあったことかどうかなんてのは分からないが、真琴が読んでも特に問題はなさそうだ。

いや、待てよ？

俺には何ともない話だったとしても、真琴にしたら何て言うかこう、魂を揺さぶるような衝撃的な話があるかも知れないじゃないか……。

うーむ……これは困ったな……。

ひとまずこの本を真琴に読ませるのは後回しにしておくとしよう。俺が学校に行ってる間に勝手に読まれても困るから、これはしばらく持ち歩くとして、真琴には「まだ読み終わってない」とでも言っておけばいいよな……。

俺はそう結論を出して、ひとまず本を鞆の中にした。すると、その直後にカチャリと部屋のドアを開ける音が聞こえた。

ノックも何もせずに俺の部屋のドアを開けるやつと言えば、まず真琴しかいないし、俺がドアの方を見るとそこにはやはり真琴の姿があった。

「祐一……晚饭だって、秋子さんが」

が、その言葉にはいつもの元気がないし、表情もおおむねそれに見合ったような暗さがあつた。

「ああ、行くよ。ところで、さっきの問題集は進んでるのか？」

「うん、ちょっとだけ分からないところがあるけど……」

『薫風の丘』

「それなら後で見てやるよ」

「うん…」

相変わらず煮え切らない返事ばかりだったが、それが勉強疲ればかりではないことくらい、俺にも十分感じ取れた。問題集を進めていながら、やっぱりこの本のが気になっていたに違いない。

やれやれ、こんな調子じゃ勉強をしている意味があまりないかも知れないじゃないか。どっちにしても、このまま放っておけないことだよな、こりゃ。

「ま、今は晩飯の方が優先事項だけだな」

ここで暗くなってもしょうがないので、俺はわざと軽い調子で言いながら、真琴の腰とかお尻を押しようにしてみせる。

「わあっ、どこ触ってるのよう！ このスケベ！」

すると案の定、いつもの真琴らしい反応を返してくれたが、その反応があまりにも良かったので俺はさらに言葉が続けることにした。

「今さら恥ずかしくすることもないだろ？ 何と言っても、一緒に風呂に入った仲なんだからな」

「ウソよっ！ 真琴が祐一みたいなスケベと一緒に入るはずがないじゃない」

俺の言葉に重なるくらいの早さで、まさに即答する真琴だが、俺は決してウソは言っていない。まあ正確には真琴の了承なしで、俺が勝手に入った…と言うことになるんだが、一緒に入ったのは事実だ。

「ウソじゃねーよ」



『薫風の丘』

俺の短い言葉に対して、ぶんぶんと頭を振りながら真琴はさらに反論を続けた。そう言ったところで事実が変わらないのにな。

「ウソよウソっ！　だって、真琴はそんなこと覚えてないもん！」

「そりゃ、記憶なくしてるんだから、覚えてなくて当然だろ？」

「あうーっ、祐一に裸を見られたなんて…もし本当だったら、死にたいよう」

うーん……一緒に風呂入るくらいでそれだけ言われるとなあ、一月二十四日のことを言ったらどんな反応をするんだろうか。……興味はあるけど、これは黙っていた方がよさそうだな。

「まあ、そんなことよりも、晩飯が先だって」

さっきと同じようなセリフを言いながら、俺は今度は真琴の肩を押すようにしながら前へと歩き出す。

「あう…」

真琴はちよっただけ前のめりになったが、すぐに立て直して俺の方を怒った顔でにらみつつ、俺の前を歩き出した。

とりあえず本のごまかせたみたいなので、ちよっとはかり怒らせてしまっても、それはよしとしておこう。何と言っても、不安げな表情よりは少しばかり怒っている表情の方が真琴らしいからな。

結局この日、俺は終始そんな調子で真琴に接していたので、真琴の方も本のことを俺に言ったりはしなかった。

明けて月曜日。

真琴には本のことをはぐらかして、鞆の中に本を入れたまま学校へ。

天野ならこの本のことを知ってるだろうし、さっそく昼休みにでも相談してみようと思つた俺は、いつも以上にテキストに午前中の授業を過ごしていた。

そんな風にならだらしてたおかげでいつもより少し遅く、それでもいつものように昼休みに中庭に行こうとしたら、途中の渡り廊下で天野と出くわした。

「あ、天野、どうしたんだよ、今日は中庭じゃないのか？」

少しだけびびくりしたものの、俺が手短かにそう尋ねると天野はちらっと外の方を見た後に短く答えた。

「今日は天気がいいですから」

天野に言われるまでもなく、天気がいいのはよく分かっていた。だから俺は中庭に行くと思つていたので。

「天気がいいから、中庭に行くんだろ？」

天野の行動と言葉の関連が今ひとつつかめなかつたので、俺がそのまま疑問を口にするのと、天野は困つたように笑つてみせる。

「中庭はもう人がいっぱいですから」

「ああ…」

そう言えば、中庭はシーズンには生徒でいっぱいになるとか言つてし、先週から確かに

『薫風の丘』

人の数が増えていたような気がするな……

それにしても、人が増えたからと言って、そこを避けようとするのも何となく……天野らしいって言えばらしいか。

「相沢さんは中庭ですか？」

「ん？ いや、俺は人が多いのは好きじゃないからな」

それは決してウソじゃあない。まあ苦手と言うこともないけどな。なのに、天野の方はそれをそのまま素直には受け取りはしないようだ。

「わたしに気を遣ってるのなら、結構ですから」

真顔でそんなことを言ってるが、それが天野の本心かどうかはこの際置いてくとして、俺としては単に天野と一緒に昼飯が食えればそれでいいわけだ。

「何言ってるんだ、お前？ 俺は本当に人混みとかが嫌いなんだぞ」

「それじゃ、どこに行くんですか？」

俺の否定を受けてなお、納得していない様子の子の天野だったが、俺としてはこんな風なたわいのないやり取りも悪くないと思ってるのだ。

「そうだな……」

「中庭も学食も人がいっぱいですよ」

その時、相も変わらず真面目な口調を続けていた天野に対して、俺は少なからずいたずら心を抱いていた。

ここは一つ、こいつを驚かしてやろうじゃないか……って、まあ無駄かも知れないけどな。「それじゃ、俺は天野のいるところならどこでもいいや」

『薫風の丘』

どうせ、こんなことを言ったところで、いつもの調子で「ふざけないでください」とか言うに決まって……。

「……相沢さん」

あれ？ 予想と違う反応だな…。

「それなら、わたしの教室に来ますか？」

………やられた。

いつの間にか天野もこんな鋭い反撃を出すようになっていたとは、俺もうかつだった。

いくら何でも、下級生の教室に行って机を並べて（まだそこまでは言っていないが）食べるなんて恥ずかしい真似ができるはずがないじゃないか。

「それとも一人で食べますか？」

うっ……完全に天野に見透かされているような気がする。と言うか、間違いなく見透かされているよな、これは。

確かに下級生の教室で……なんて恥ずかしい真似はできそうにない。が、このまま引き下がるのも、釈然としない…。

ええーい、後は野となれ山となれ、だっ！

「お前がいいなら、それでいいぜ」

「えっ……」

やった！

さすがの天野も、俺がそこまで言うとは予想していなかったらしく、わずかに口を動かしただけで固まってしまった。

『薫風の丘』

ふふん、この勝負：勝ったな。

「それじゃ、お前の教室に行くとするか？」

「あ、相沢さん……」

珍しく天野が動揺している。うんうん、こんなのも悪くはないな、本当に。

「……分かりました、それじゃ行きましょう」

「おう！」

……って、ちょっと待て。

行くって……二年生の教室にか？ と、俺が確認をする間もなく、天野はすたすたと階段の方に歩き出している。

マジなのか？ と訊きたくてたまらなかったが、そもそも天野がそんないたずらめいたことをするとは思えない。

「天野？」

「この時間なら、クラスの人の多くは学食に行ってますから」

「そうか……」

どうやら天野は本気でそう言ってるらしい。

すでに階段を上っているし、歩く速度が落ちる気配もない。

やれやれ……自業自得とは言え、この際しようがないか……と、俺があきらめかけた時だった。

階段の途中で、俺より二段ほど先を歩いていた天野が不意に足を止めて、俺の方に振り返った。

『薫風の丘』

「相沢さん」

「何だよ？」

階段のおかげで身長差はほとんどなく、いつもと違った角度で俺が天野に訊き返すと、天野は少しだけ怪訝そうな表情を見せた。

「本当に行くんですか？」

「うっ…」

ここでな有意地を通すか、素直にやめておくか…。

「わたしと一緒にならって頂けるのは嬉しいですけど、教室では話もそんなにできないと思いますから」

…いやまあ、ここはせっかく天野がこう言ってるのだから、素直にそれを採用しようじゃないか。

「そ、そうだな。真琴のこととか…確かに教室じゃ話しづらいからな」

「それじゃあ、やっぱり中庭の階段にしますか？ あそこはいつも人がいないですから」

「そうだな……って、ちょっと待て？」

「はい」

「階段のところって、いつものところだろ？」

「ええ、そうです」

「あそこはいつも人がいない…って言ったよな？」

「はい、確かにそう言いました」

やっぱり真面目に答えるその表情は、何と言うか…迫及をさり気なくかわしてるように

『薫風の丘』

も見える。

「…天野？」

恐らくは怪訝そうな表情の俺に対して、天野はいつもの表情。

「何でしょうか」

「もしかして、俺で遊んでるのか？」

「いえ、そんなことはありません」

「そうか？」

「はい」

…真面目な表情でそんな風に切り返されてしまったら、俺には何も言えやしないじゃないか。どっちにしても、天野が俺を相手にならかってる…なんてことはないだろうしな。

「分かったよ、そんなじゃいつものところに行くとするか」

観念したつもりでそう呼びかけながら俺が体の向きを変えると、その背中に天野の返事が届く。

「はい」

やっぱりその声の調子はいつもと変わらないもので、きっとその表情も真面目なまんまなんだろうな…と思っていた。

だが…。

「…くすっ」

真面目な返事の後にかすかに聞こえたのは…と、俺があわてて振り向くと、そこには、自分の手を口に当てて、必死に笑いをこらえている天野の姿があった。こらえている…と

『薫風の丘』

言っても、北川みたいに馬鹿笑いを押さえてるようなのに比べたらはるかにささやかで、「ああ、天野もやっぱり女の子なんだな」って改めて感じさせるくらいのものでした。呆れる…と言うよりは、何だかそれにつられてこっちまで笑いたくなくなってくるような、そんな可愛らしい仕草だった。

「…天野？」

「…すみません…笑うつもりはなかったんですけど」

そう言いながら、天野の手は未だに口を押さえるようにしている。つまり俺はさっきから天野にいいように遊ばれてしまったと言うワケだ。

ま、こっちも笑える話だし、天野がそんな風に笑えるんだったら、俺がそれで怒る理由なんて全っ然ないと言うものだ。

「そんなの気にすることじゃねーよ」

悪びれず、特に不機嫌さもなく、俺は普通に答えたつもりでそう言いながら天野の方をもう一度見た。

すると、天野のやつは…：何がおかしいのか、まだ笑っていた。以前の天野をよく知らないから何とも言えないが、天野の母さんのことを思えば、意外とこいつは笑い魔なのかも知れないな。

その後、俺は笑っているままの天野を引き連れるように、中庭へと向かったが、天野がいつもの真面目な表情に戻ったのは、中庭に出てからだだった。

そして、天野はいつもの場所に腰を下ろして小さなランチボックスを膝に、俺は学食で買ってきたパンを立ったままむしゃむしゃと食べ始める…言っても、そんな風な擬音語が



『薫風の丘』

適当なのは俺だけであって、天野の食べ方は至っておとなしいもんだ。まあ、向かい合って座ってるわけじゃないから、天野の食べ方をじっと見ていることもないんだが。

「それで、真琴の話はいいんですか？」

食べ始めてからしばらくして、天野が箸を止めて尋ねてきた。

「ふえ？　はふおふおのはげし？」

そう言いながら、ここで俺が天野とする話題と言ったら、真琴のことか天気のことしかなく、ちよつと考えてみればそれは当然だなと思う。

パンと同じく学食で買ったウーロン茶をぐいっと飲んで、口の中にあつたものを流し込んでから、俺は苦笑混じりに返す。

「毎度そればかりなのも何だけどな」

「いえ、わたしも真琴のことは気になりますから」

「そうか。いや、まあ、勉強の方はおおむね順調だな。遅くとも夏休み明けには編入試験も行けるんじゃないか？」

何だかんだと言いながらも、中学の問題集レベルには届いているのだから、この予想も別段的はずれではないと思う。

「それでも大変そうですね」

天野が苦笑混じりに言った。俺に怒られながら勉強を頑張る真琴の姿でも想像しているんだろうな。そして、俺もそれに合わせるように小さく笑う。

「まあね。文句は相変わらず言ってるし、よくサボろうとするしな。でも、本当によく頑張ってるよ、あいつはさ」

『薫風の丘』

「わたしもお手伝いしますから、いつでも呼んでください」

真剣な表情でそう答える天野だったが、無論これまで天野を仲間はずれにしたことはない。ただ、天野の家がちょっと離れていることもあって、毎日と言うのはさすがに俺自身に抵抗があった。その辺は天野も分かっているだけに、天野は土曜や授業が早く終わる日に真琴の様子を見に来てくれているのだ。

俺も実際のところ、常に真琴の面倒を見れるわけじゃないし、たまには一人でのんびりしたい時もある。まあ、そんなタイミングを分かってくれているように、天野が来てくれるので本当にありがたかった。

「ああ、また頼むよ……ところでさ、天野」

「はい」

「お前は『ものみの狐』と言う本を知ってるか？」

ふとそれまでの話題を打ち切って、俺は気になっていた本のことを話し始めた。この本のタイトルだけを言ってみれば、天野ならそれなりの反応をするに違いない、そう確信しながら。

だが、天野は少しの間だけ考え込むようにうつむくと、俺の確信をあっさりと否定する。

「いえ……知りません」

「知らない？」

ちょっと意外だった。

何と言っても、ものみの丘の狐たちに関しては、天野の方が俺よりも先輩になるわけで、当然のごとくその本もすでに読んでいるに違いないと思っていたから。

それでもやっぱり天野は気になるのか、わずかに怪訝そうな素振りは見せている。まあ、当然と言えば当然だけだな。

「ええ。でも、そのタイトルからすると…」

「気になるだろ？ 俺も昨日本屋で見かけて、気になったもんだから買ってみたんだけどな」

「どんな内容ですか？」

「いや、中身は普通の民話集だよな、要するに」

さっきよりも真剣な表情の天野に対して、俺は別段意識することなく極めて普通に答えてみせた。普通の民話集であることは間違いないし、それ自体は特に気にすることはないだろうと俺自身思っていたから。が、それは天野には肩すかしみたいな感じになっただけい。

「そうですか…」

落胆なのか安堵なのかよく分からないが、とにかくまあ拍子抜けしたことは間違いなさそうな返事を受けて、俺はすぐに言葉を続ける。

「だけどな」

「何かあったんですか？」

さすがに反応が早い。この打ては響くような反応は、名雪には到底できない芸当だと思う。

「真琴のやつが妙に気にしてるんだ。その本に『懐かしい感じがする』とか言い出してね」

『薫風の丘』

「懐かしい感じ…ですか」

天野は俺の言葉を真剣に聞いてくれるし、話してるそばから思案を巡らしているのが見て取れる。いや、別に名雪や秋子さんが真剣に聞いてくれないわけじゃないんだ。ただ、あの二人は俺の予想をはるかに超越した場所から答えを返してくるから、よく分からないんだよな…。

「んで、とりあえずその著者に会えるかも知れないんだな、これが」

「何だか話が唐突ですね」

天野が思わず小さく笑ってみせるが、俺も実際唐突だと思う。さっきの表現をするのなら、これも秋子さんならではの突拍子もない提案には違いない。だけど、秋子さんの提案があったかったのも本当なのだ。

「俺もそう思うけど、秋子さんが折り合ってくれることになってね」

「それはいつですか？」

「まだ日は決まっていなし、本当に会えるかどうかは分からないぜ。それに会っても何も無いかも知れないだろ？」

と、俺が今の時点で言えることを伝えようと、天野はすぐに俺に向かって言葉を続けた。

「でも、相沢さんはそう思っていないから、それをわたしに話したのではないですか？」

俺への問いかけと言うよりは、ほぼ確信に近い口調だった。そして、それはもちろん天野の言う通りだ。

「まあな」

「真琴が気にする何かが、その著者に会うことではつきりするかも知れないと思ってる

のでしょう？」

俺は言葉を出さずに、こくりとうなずいた。

何がどうなるのか：なんてことは分からないし、怖い考えや暗い見通しなんてやり始めたらいくらでも尽きやしなくて、そんなのは今さら気にすることじゃない。

真琴が傷つくようなことさえなければ、それでいい。そのことは天野だって分かっている。だからこそ、俺には天野が次にどんなことを言うのかなんて、簡単に予想できなかった。

「それでは、わたしも一緒にいいですか？」

「ああ、真琴と行く前にお前に一緒に来てもらうつもりだったんだ」

秋子さんと真琴には申しわけないが、俺は直接真琴を高木と言う著者に会わずつもりはなかった。二度手間になろうが、最初は真琴抜きで会うつもりでいた。ただ、一人じゃちょっと心細かったのは確かで、こうして天野を誘ったのだが、それは、天野も分かっているんだろうな…。

「分かりました。それでは、日が決まったら教えてください」

ちよつとばかり自分が情けない感じもしたが、天野の方はやっぱりいつもの真面目な表情のまま、何一つ余計なことには触れなかった。

「ああ。それから、後でその本を渡すから、読んでおいてくれよ」

「はい」

天野の短くはつきりとした返事。それは俺の期待や不安さえも承知の上で答えてくれる天野の気持ちそのままだったと思う。そして、それは俺にとって何よりも嬉しいものだっ

た。

—\*—

狐が鳴いている。いや、泣いている。

苦しいほどに叫びながら、両の目から血のような涙を流している。

その叫びは何だろう。何かに対する呪詛なのか。悔いても悔いても贖うことの叶わぬ怒りなのか。

狐は人々を憎んでいた。

狐は自分の半身を奪った村人を憎んでいた。

狐は己を憎んでいた。

何もできなかった己の無力を憎んでいた。

狐は誰よりも他の狐たちよりも…人を、人の温もりを愛おしく思っていた。何よりも、

誰よりも。

始まりは些細なことだった。

丘に棲む若い狐たちがはしゃいでいただけのこと、そのうちいずれの狐が勇氣試しと称して、人の住む村を見てみようと言った。

その狐たちの中に、耳の部分に黒い毛が混ざっていて仲間うちでは黒耳（くろみみ）と呼ばれる狐がいた。

黒耳もまた他の若い狐と同じく勇氣試しに参加した。

『薫風の丘』

そもそもの始まりはそれだけのことだった。

だが、黒耳は見てしまった。

出会ってしまった。

触れてしまった。

寂しげな笑顔を。

物を言えぬ娘に。

そして、人の温もりに。

それが、すべての始まりだった。

黒耳は勇気試しの一番最後の番だった。仲間はずれ、村へ行った証拠に村にあった何かを一つ持ってきており、その成果を自慢しあっていた。

そんな折、黒耳の番になった。

黒耳は勢いよく飛び出して行った。仲間うちで一番大きな物を持ち帰って自慢してやろうと意気盛んだった。

一方、すでに何回も狐がうろつき回っては何かを持って行くのを村人が放っておくことはしない。黒耳が村に入るなり、すぐに村人たちに追い回されることになって、黒耳も最初は余裕を持ってかわしていた。だが、それも長続きはしなかった。

黒耳が最後と言うこともあって、村にはすでに他の狐の姿はなく、他の狐を追い回していた連中がほとんど黒耳だけに集まってくる。

勇気試しと言う遊びではいられない。

そう直感した黒耳だったが、すでに逃げ道のほとんどはふさがれてしまい、黒耳はやが

て断崖に追いつめられてしまった。

人に捕まるくらいなら、自分で死んだ方がいい。

村人を崖の上に残したまま、黒耳はその身を崖下へと投じた。黒耳を追っていた村人も、その崖下まで追い回すこともせず、村へと帰った。

崖下に身を投じた黒耳は、その下に茂る木々の合間に上手に体を預けてどうにか下に降り立つことができた。とっさにそれだけのことができたのは、それだけ黒耳が素早かったと言ふことだが、それでも五体無事には行かない。

体のあちこちから痛みはしたが、特にひどいのは後ろ足らしい。木々の合間を降りる時、恐らくは一番最初の木に当たった時に、かわしたつもりでも幹に後ろ足を打つたらしく、激しい痛みがあった。どうやらぶつただけでなく、折れた枝にでも引っかかったのだろうと思われる大きな傷もある。

崖下にまで村人が追ってくる気配はなかったが、ここでのんびりとしている余裕はない。そう思った黒耳が思うように動かない足をかばいながら、可能な限り速く歩いていると、不意に人の気配を察知した。

今の自分の足では村人に追われたら逃げることはできない。それは十分に承知していたので、黒耳はひとまずそつと息を潜めて様子を伺うことにした。

がさり、と物音が近づいてくる。

黒耳は一層警戒をしながら、音のする方に神経を集中した。

がさがさ、とさらに物音が近づいた時、黒耳は妙だなど思っていた。

自分はさつきから必死に隠れているはずで、周りが木々に囲まれた場所ではたやすく自



分を見つけないと思つていた。だが、物音は確実に自分の方に近づいてくるではないか。

自分の場所が見抜かれている。

そこまで思い至つた時、黒耳は後ろ足の痛みなども忘れ、すつくと立ち上がり、近づいてくる物音の方に集中した。今度は隠れるためではなく、近づいてきた者を攻撃するため。

そして、すぐにそれは黒耳の視界に入ってきた。

その姿を見るまで、黒耳はすぐに襲いかかるつもりでいた。痛みを忘れて立ち上がったのもそのためだった。

だが、得物を手にして先ほどまで自分を追い回していた村人とは、明らかに違つていた娘。

身なりも顔も、お世辞にも綺麗とは言えない娘だった。恐らくは山草摘みでもしているのだろう、小さな鎌とかごを持っていた。

小さな鎌を手にしているとは言つても、相手が娘である以上は今の黒耳でも大した敵ではないのだが、黒耳は娘に飛びかかることはしなかった。

ここでこの娘を倒したところで、今度は村人が本気になって自分を探し回るに違いない。そうだった時、この足では逃げおおせるものではない。

幸いにも娘は自分を見てからと言ふもの、ひとことも発せずにいるし、このまま、この場から自分がつつと消えた方が得策である。

黒耳はそう考へていた。

そして、黒耳が少しずつ後じさりを始めると、そこで娘が思い出したように動きを見せた。

だが、相変わらず言葉はなく、手を伸ばしただけだった。

その行動の意味が分からなかった黒耳はそのまま後じさりを続けていたが、すると今度は娘がさらに動きを見せた。

それまで自分が持っていた小さな鎌を後ろの方に落とし、不意に黒耳の方に走り寄ってきたのだ。

捕まる。

そう思った黒耳はとっさに飛び退けようとしたが、それが裏目に出てしまった。予想外の行動をとった娘に半ば驚愕して、急に動いたのがまずかつたらしく、それまで保っていた緊張が一気に解けてしまい、後ろ足がぐりと動かなくなってしまったのだ。

無様な姿だった。

軽々と村人をおかして、意気揚々と丘に戻って、仲間に自慢するはずだったのに、こんなところで得体の知れない娘に捕まるなどとは。

こうなってしまうては、ここで娘の喉に一噛みでもしないことには収まらない。たとえそれが無意味であっても、自分なりの意地もあった。

そうして黒耳は娘がより近づくのを待った。

もはや自分は動くことが叶わない。機会はまだ一度、娘が無防備な喉を自分に近づけた時だけだ。

見ると娘はすぐそばにまで来ていた。

『薫風の丘』

あと二歩。

あと一歩。

この次に足を出して自分の方に近づいたら、その喉に噛みつく。それが自分の最期の意地と誇りのすべて。

娘がさらに一歩。

噛みつくのは今しかない。

瞬時に黒耳は己の口を娘の喉へと向けた。

が、その時が初めてだった。

黒耳がその娘の顔、いや、表情をまともに見たのは。

それは自分を追い回していた村人の誰とも違う。

幾度となく街道を通る旅人を見てきたが、そのどれとも違う。

そもそも、先ほどから自分がこれ以上もないほどに敵意をむき出しにしているにも関わ

らず、娘の態度にはそれに対する警戒が微塵も感じられなかったのは何故だろう。

先ほどからずっと自分に向けられている、その表情は何だろう。

愉悦？ いや、かすかに笑ってはいるが、楽しそうではない。

蔑み？ いや、違う。

回避？ それでもない。

憐憫？ そう思わなくはないが、やはり違う。

そうだ。

それは、寂しさを帯びたような気がする。

それは、悲しみだったような気がする。

何故？

黒耳はもはや唾みつくどころではなかった。自分が相対した娘の、悲しいような寂しいような不思議な表情に、すっかり魅せられていた。

ふと気づくと、娘は黙ったまま一度だけ黒耳に微笑みかけ、腰につけていたかごから何かの葉を数枚出して、それをそれを近くににあった石で器用にすりつぶし始めた。

娘が一体何をするつもりなのか、黒耳にはさっぱり分からなかったが、それよりも先ほどこからひとことも娘が言葉を発していないことが気になった。

娘は相変わらず無防備に喉もさらしているし、言葉を発していないのが分からないが、今の状態なら娘にとどめをさすのは至って容易なことだ。

だが、黒耳はやらなかった。

そんなことよりも、娘に対する興味が強くわいていた。

一体この娘は何者なんだろうか。

一体自分をどうしようと言うのか。

何故ずっと黙っているのか。

どれも分からないことばかりで、これまで黒耳が見てきた人間とは何一つ同じ点がない。いや、あるとすればそれは、娘も人間であると言う極めて単純なことだけだった。

ややあって、娘が何をするつもりだったのか、黒耳にも理解できた。

先ほどすりつぶした葉は薬草らしく、それを後ろ足の傷口にそっと塗りつけていたのだ。どうしてそんなことをするのか黒耳は不思議に思ったが、それよりも薬草が傷口にしみて

言いようのない痛みを呼んでいた。

びくり、と黒耳の体がこわばる。

またも無様な格好をさらしている自分に嫌気がさしてしまう黒耳だったが、足は動かないし、その痛みから来る震えを抑えようにもままならないのが本当だった。

すると。

何を思ったのか、娘は自分の手をそっと黒耳の顔に寄せてきた。

思わず黒耳はその手に噛みつくろうかとも思ったが、娘の手が自分の顔に触れた時、何もすること能わずにじっとしてしまった。

葉草をすりつぶす以前にずいぶんと土をいじっていたのか、娘の手は土の匂いがして、やはり綺麗な手指とは言えない、ひどくざらついた感触だった。

だが。

その手が触れた時、黒耳は見てしまった。

その手が触れた時、黒耳は感じてしまった。

笑顔と温もり。

それは黒耳がこれまで生きてきた中で、まったく初めて触れるものだった。確かに仲間うちでも寒い時は身を寄せ合う。確かに仲間うちでも笑ったりすることはある。

しかし、自分の目の前にあるものは違った。

何故かは知らないが、娘のざらついた土臭い手は温かかった。

娘がその手で自分の顔をそっと撫でると、足の痛みが消えるような気がしてならなかつ

た。

そして、改めて黒耳が娘の顔を見ると、何とも言えないくらいに穏やかな表情をしていた。

何故、言葉を発しないのか。

それが気になった黒耳がそっと自分の鼻先を娘の口に近づけてみせると、娘は嫌がる素振りを見せずに何も言わずに困ったような笑顔を作るだけだった。

言葉を喋れない人間：それを何と言ったろうか。

黒耳はそんなことを思いながら、なおも娘の口を自分の鼻先や舌でつついてみたが、娘の反応は変わることがなかった。

どうやら、この娘は口が利けないらしい：と、そんな結論を出した黒耳だったが、同時に馬鹿馬鹿しさもこみ上がる。

この娘の口が利けないのだろうかそうでなからうが、それに何の意味があるだろう。口うるさい人間と本質的に何ら変わらないかも知れないのだ。ただ言えないだけで、心の中では自分のことをどう考えているか分からないのだと。

その時だった。

それまで黒耳のされるがままにしていた娘が、ふっと表情を曇らせたのは、  
そして。

娘は寂しげな笑顔を見せながら、今度は黒耳の顔に両手を添えるようにしてから、ゆっくりと自分の首を横に振って見せた。

今のは一体何なのだろう。

黒耳が戸惑っていると、娘は片方の手を離して自分の口に人差し指を立てて見せ、ごくくと一人でうなずいた後、また穏やかな笑顔を見せた。

それが何を意味するのか、黒耳にはよく分からなかった。だが、黒耳は何故か安心してた。少なくとも、この娘は自分の敵ではないのだと理解して。

それが何なのか分からないまま、黒耳はえも言われぬ心地よい温もりを感じていた。そして、いつしか黒耳は目を閉じて、心地よい温もりに抱かれるように微睡んでいった。

—\*—

「——っ！」

何かの拍子に、俺はほとんど反射的に体を起こしていた。

そこは見慣れた自分の…水瀬家の二階の部屋だった。

窓の外からは朝の光が射し込んでいるし、枕元にあった時計を見るとぼちぼちいつも起きる時間になるうかと言う頃だった。

しかし……。

何かすつきりしなくて、パジャマが体に張り付いている感触が気持ち悪い。イヤな夢でも見ていたのか…と思いはしても、さっきまでどんな夢を見ていたのがさっぱり思い出せない。

「何だっただよ…」

と、俺がひとりごとを漏らすと、

『薫風の丘』

「うん…一体どうしたの…」

誰かが合いの手を入れてくれた。

…え？ 誰だ？

と、俺がその声のした方がぼつと向きを変えると……ベッドの脇にべたんと座り込んでいる真琴の姿があった。何となく真琴の顔が赤いような気がするが、そんなことを気にしてる場合じゃない。

「真琴っ？ ……な、何で、お前がここにいるんだよ……」

今の事態がさっぱり飲み込めない俺は、真琴に説明を求めたつもりだったが真琴の方は顔を赤らめたまま、うつむいてしまっただけだ。

「あうー……」

このままじゃ埒があかないと思った俺が、自分の手を動かそうとした時。

「あっ…」

真琴が小さく声を上げた。と、ほぼ同時にその声の理由が分かってしまった。

「何だよ、この手は…」

「あうーっ…真琴じゃないんだからあ」

「俺の手につながってるのは、どう見てもお前の手にしか見えないんだが？」

そうなのだ。

今まで気づかなかったのだが、俺の左手は真琴の右手にしっかりと握りしめられていたのだ。

「あうーっ…それは…」



『薫風の丘』

そこでようやく真琴の手が俺から離れた。と言うより、いきなり真琴が手を引っ込めた。やれやれ：朝っぱらから何をするつもりだったんだか分からないけど、ここは一つはつきりさせておかないとダメだな。

「なあ、お前：何してたんだよ？」

「：朝だから」

「朝だからって、人の部屋へ勝手に入って、人の寝顔を見ながら、人の手を握るのか、お前はっ」

俺が少しだけ声の調子を強くすると、ようやく観念したのか真琴もうつつむきながらぼつりと反論する。

「違う……」

「どこがどう違うってんだ？」

俺が答えを促すと、真琴は少しだけ顔を上げて喋り始めた。

「：勝手に入ったのは本当だけど、その後は：違う」

「その後って？」

「あう：何となく目が覚めたら、祐一の部屋の方から声がして……」

「俺のか？」

と言いつつ、ここに俺以外の誰かがいたとは思えないのだから、やっぱり俺の声なんだろう。もっとも、眠っている間のことなんてさっぱり覚えていないんだから、本当に俺の声だったのかどうかは分からないけどな。

「うん：それで、気になって様子を見に来て……」

『薫風の丘』

「そこで勝手に入ったわけだ」

「あう…でも、最初はドアから様子を見てただけよう…」

「じゃ、何でこうなってたんだ？」

こうなって…とはもちろんこうしてベッドの脇に真琴がいることと、俺の手を握っていたことだ。が、俺がそう尋ねた途端、真琴はまたもや黙り込んでしまった。

「……」

「どうした？ 言えないわけでもあるのか？」

別に責めるようなことでもないのに、俺の口調はいたずらをした子どもを叱るような感じになっていた。いや、この場合は実際にそんな状況なんだから、そのまんまに違いない。

「……苦しそうにしてたから…」

「はあ？」

「……何かに怯えていたように、祐一ふるえていたから…」

「誰が…」

真琴の言葉に怪訝そうに返した俺だが、そう言われてみればさっきまで見ていたはずの夢のことが気になってしょうがなかった。ふるえていた…なんて自覚はないが、起きた瞬間の気持ち悪さは何だろうか。

「だから、真琴がそばに寄ってみたら…とてもつらそうにしてたから…」

「…それで手を？」

俺がそう訊くと、真琴はこくと小さくうなずいた。

相変わらずつが悪そうにしていたが、よくよく考えてみれば真琴は俺の様子を気にし



『薫風の丘』

『朝く、朝だよ』

言うまでもなく、俺が使っている目覚まし時計の音だ。別の音声に変えてもいいんじゃないかと思ったこともあったが、名雪に「変えちゃダメだよ」とも言われているし、特に困ることもないのでそのままだったりする。

『朝ごは……』

気を取り直すように俺が目覚ましのスイッチを切り、ようやく普通の表情に戻って、真琴の様子を確認してみると、真琴は相変わらず困った顔のままだった。

「笑ったのは悪かったよ。でも、別にお前のしてくれたことがおかしくて笑ったんじゃないのは本当だぞ」

そんなことを言ったところで、真琴が素直に聞くとは思ってはいないが、それでも俺なりに真琴に「ありがとう」を言ったつもりだ。

「…そうなの？」

やっぱり真琴は全然分かっていない口振りだったが、ひとまずはそれまでのどうしようもない雰囲気だけはすっかりなくなっていた。

「そうだぞ。それよりも、もう目覚ましを鳴る時間ってことだから、俺も起きて着替えなといけないうんだけだな？」

「うん」

俺はぼちぼち自分の部屋に戻れ…と暗に告げたつもりだったが、それもやっぱり分かっていない。

やれやれ。

『薫風の丘』

「だから、俺はこれから起きるんだが？」

「うん、分かってる」

「ここは俺の部屋で、俺はこれから起きて着替えるって言ってるんだ」

「真琴は気にしないから、祐一は起きて着替えればいいじゃない」

「そーゆー問題じゃない」

「どうして？」

ダメだ。

どうにもこうにも真琴には俺の事情が理解できないらしい。まあ男性諸君には俺の今の状態つてのを分かってもらえと思うんだが、これを真琴に説明するのはちよつと…いや、かなりイヤだぞ。

「…お前は男の生理現象つてもんを分かってない」

「何それ？」

相変わらずきよんとした表情で俺に訊き返すばかりで、そんなところはまだまだおきよまだよな、こいつは。

「お前がもうちよつとオトナになったら教えてやるから、とにかく今はこの部屋から出てけ」

「何よつ、真琴は立派なオトナだからねっ」

真琴の反応は俺の予想通りのものだった。まあ確かに、体だけはオトナかも知れないけどな、それだけでオトナとは言えないものなのだ。

「はいはい、真琴さんはオトナです。ですから、ひとまず自分の部屋にお戻りください」

『薫風の丘』

な

「うーっ、その言い方すごくムカツク！」

当たり前だ。挑発するように言ってるんだから、それで素直に喜ぶやつは本当におめでたいと言うものだよな。

「そんじゃ、とつとと失せろ」

「あうーっ、人が心配して様子見に来てやったのに、その言い方はないでしょっ！」

せっかく丁寧（慇懃と言うかも知れないが）な言い方をしても、つつけんどんな言い方をしても怒るなんて：身勝手なやつだ。

「どっちにしても怒るんだな、お前は」

「祐一が両極端なのよっ！」

「本当の話、朝っぱらからここで騒いでもしょうがないから、お前も部屋に戻れって」

「言われなくても戻るわよう！ バカ祐一に付き合ってるヒマなんて、真琴にはないんだからあっ！」

すっかり怒った真琴は一気にまくし立てたかと思うと、さつとドアの方に歩いていき、思いつきり派手にドアを閉めながら出ていった。

その音の大きさに秋子さんや名雪が不審がりはしないかと気になったが、まあ名雪がこれくらいで目を覚ますはずもないし、秋さんは：うーん、ちよつと分らないな。

ま、それはともかくとして、ようやく静けさを取り戻した部屋で、俺はさっきの夢のことを考えていた。

夢の中身はさっぱり覚えていないのだけど、それは俺がそこにいて何かを体験したと言

『薫風の丘』

うよりは、誰かが俺に話を聞かせてくれた…そんな気がしていた。

ただ、具体的な内容なんて何一つ思い出せないし、本当に誰かが話を聞かせてくれたのかなんてのも分からない。だが、それは少なくとも枕元にいた真琴じゃないし、真琴以外の誰か…なんてこともあるはずがない。

もしかしたら俺自身がずっと気にしていたことが夢に出ているのかも知れない。でも、何も覚えてないのは何だ……。

……………。

と、このまま悩んでいてもしょうがないな。

わけの分からない夢のことを振り切るように、俺は勢いをつけてベッドから起きあがった。

身支度を整えた俺が台所に顔を出すと、いつものように秋子さんが笑顔で朝食の準備をしているところだった。

「おはようございます」

「おはようございます、祐一さん。ところで、さっきものすごい音がしたけど、何かあったの？」

俺が挨拶をすると、秋子さんは初めは笑顔で、そしてすぐにほんの少しだけ怪訝そうな表情になった。

やっぱりさっきのは、ここまで響いていたのか。それにしても秋子さんがそんなことを気にするなんて、ちょっと珍しいかも知れない…って言ったら悪いか…。

「いえ、ちょっと…」

いくら秋子さんとは言え、さっきのできごとをありのまま話すのには抵抗があると思って俺が言葉を濁すと、秋子さんはほんの少しだけ困ったように笑う。

「祐一さんもやっぱり男の子なのね」

「はい？」

…これは一体どういう意味で言ってるんだろうか。やっぱり男の子だから乱暴なのねって言う意味？

……って、まさか真琴がいたことをお見通ししてんじやないだろうな？ まあ、ここはひとまず無難な答えをしておこうじやないか。

「いやあ…ちよつと乱暴に閉めちやいましたから。すみませんでしたね」

と、俺が普通に答えた後、秋子さんはいつもの笑顔に戻って、ひとこと。

「本当に祐一さんは真琴と仲がいいんですね」

「…へ？」

その時の秋子さんの表情はいつもの優しい笑顔のまま。

でも、俺はどうすればいいのか、さっぱり分からない表情で固まっていたと思う。ただし、秋子さんはそんな俺に構わずに、普通に話を続けている。

「それにしても、名雪はあの音でも目を覚ます気配がないみたいね」

「…は、まあ、そうですね」

さすがに何も受け答えしないのはよくないと思って、どうにか合いの手を入れてはみたものの、極めて不自然な感じだった。それに対して、秋子さんは至ってマイペースと言った感じ。まあ、秋子さんのマイペースはそう簡単には崩れないもんだけどな。



『薫風の丘』

「どうかしたんですか？」

「いえ……あの、秋子さん？」

「はい」

「いえ、何でもないです…」

やっぱりこの人は何でもお見通しなのかも知れない……。

そもそも、ドアの音を聞いていたつてことは、その前の真琴の声なんかも秋子さんには聞こえてたのかも知れないじゃないか。

そんな風に俺がひとまず結論を出すと、秋子さんがそこで思い出したように喋りだした。

「ところで、祐一さん。あの本の著者の高木さんのことなんですけど」

「あつ、はいはい」

「ご本人はこの街に在住されていて、いつもご自宅にいますので、訪ねてきて欲しいのとことです」

「えっ？ もうそんな話までしてたんですか？」

思わず俺は驚きを隠せなかった。と言うのも、昨日の夜にはそんな話はひとことも出てこなかったもので、まだ先のことだと思っていたのだ。さらに、この街にいるなんて言われて、ちよつとばかり拍子抜けした感じがした。

「それで、どうします？」

「いきなり行ってもいいんですか？」

一応訪ねる前に電話なり連絡をする必要がありはしないか、と思つて俺が訊き返すと、秋子さんも妙なボケはなしでそれにきちんと答えてくれる。

「電話はないから、いつ来てもかまわないと言われたそうですよ」

電話がないって言うのは…今どきにしちゃ珍しい。何にしても、直接会ってみたいと話が進まないってことだよな、これは。

「ふーん…それじゃ後は自分でやりますよ…っと、そうだ。秋子さん、この話はまだ真琴には言わないでおいってください。一度真琴抜きで会っておきたいと思ってるもんですから」

昨日学校で天野に話したことを踏まえて俺がそう言うのと、秋子さんは小さくうなずきながら笑顔で答えてくれた。

「ええ、祐一さんがそう言うだろうと思って、この話は真琴には話してませんから」

そもそもこの話を昨日の夜ではなくて、朝の台所で言う辺りに秋子さんの心遣いが現れていた。と言うのも、真琴は一階に下りてくるのはもう少し遅い時間だし、あいつが一階に来る時は、その騒ぎようですぐに分かるからだ。

今朝はいつもより早く起きたことになるが、たぶん真琴は自分の部屋で二度寝をするに違いないので、この話が真琴に漏れる可能性は極めて低い。

「本当にすみません」

俺が軽く頭を下げると、秋子さんは笑顔のまま、

「ちょっと待っててくださいね。住所を書いたメモを持ってきますから」

と言って、台所から出ていった。

俺は台所に一人取り残される形になり、ふと誰かが下りてきたりしないかと廊下の方に注意を向けてみたが、まだ真琴も名雪も下りてくる気配はない。

『薫風の丘』

朝食の準備の途中だったと思われる流し台を見ると、サラダ菜やら赤ピーマンやらがザルに入れられていた。たぶん（と言うか、見たまんまだが）サラダの材料だろう…などと、俺が台所を物色していると、スリッパの音が近づいてきた。

「祐一さん、行儀が悪いですよ」

その声とともに台所に姿を見せたのは、言うまでもなく秋子さんだ。

それにしても、行儀が悪いと言うのは…俺がつまみ食いでもしてたと言うんだろうか？ いや、確かに秋子さんの位置からすると、俺が流し台の方で何かをしていたように見えなくてもおかしくないかも知れないのだけだ。

「別につまみ食いしてたわけじゃなくて、何を作ってるのか見てただけですってば」

いたずらを見つかった子どものように俺がそう返すと、秋子さんは納得したような表情で、手を顔に当ててうなずいた。

「すぐに朝ご飯にしますから、もうちょっとだけ待ってくださいね。それと、これが高木さんの住所です」

もう片方の手で、小さく折られたメモを俺に渡して、秋子さんはにっこりと微笑んでいる。

確かに起きたばかりで空腹なのは本当だった。だけど、別につまみ食いするつもりはなかったし、いつもに比べて特別に空腹だったと言うわけでもない。

でも、あえて今の秋子さんの言葉に反論する必要もないか…。と言うわけで、俺は受け取ったメモを見せながら、秋子さんに向かって言った。

「分かりました。それじゃ、これを置いてきますから…」

『薫風の丘』

すると、秋子さんは俺の予想通りの笑顔で答えてくれる。

「ええ、祐一さんの分はすぐに支度しておきますね」

秋子さんの笑顔に俺は軽く頭を下げて答え、そのまま二階の自分の部屋へ向かった。

—\*—

「相沢さん、この住所だとこの先を右に曲がれば……すぐですよ」

俺の少し前を歩く天野が、前方の曲がり角を指さしながら言った。

それに対する俺の返事は苦笑混じりのものだ。

「わりいな、すっかり道案内させちゃって」

こんな風に天野を道案内にして、俺と天野が歩いていると言う状態に至るまでのいきさつなんてのは実に簡単明瞭なことだ。

秋子さんに高木隆太郎の住所を教えてもらったまではよかったんだ。

だが、俺にはそれがどこを示してるのかが、全然分からなかった。要するに土地勘が全然ないってことを、今さらながら思い出してしまったわけだ。

そりゃ確かに一人で高木宅に行くつもりはなかったし、天野はすぐに分かったみたいなので、何一つ困ることはない。だけど、こうも何から何まで天野に頼りつきりと言うのは、ちよっと情けない気がしてしまうがな。

「いえ、相沢さんは知らなくてもしょうがないですから」

「そうか？ これでも結構馴染んだつもりだったんだけどな」

『薫風の丘』

「中心部から離れてると言えば離れていますから、無理はないです」

「確かにな」

今はこうして家々の間を歩いているが、ここに来るには駅前からバスで二十分ほどかかっている。土地勘がない俺には位置関係が今ひとつ分らないが、駅から見るともののみの丘とは反対の方向らしい。

「それにしても…こんなところに作家なんているもんなのか」

俺が周りをきよろきよろと見回しながら言うと、天野は少しだけ苦笑いをしながら、角を右に曲がる。

「場所はあまり関係ないと思いますけど」

俺も天野と同じく右に曲がりながら、さっきの言葉の補足をする。

「いや、もつと都会にいるもんだってイメージがあるもんで」

そして、俺がそう言った後、天野が一軒の家を指さした。

「ここですね」

天野の指さした先には、『高木』と言う表札がかかっている一軒の家があった。その造りにしても雰囲気にしても、周りの家とさほど変わらない、言い換えれば至って普通の家だった。

「ああ…。それにしても、表札もそのまんまか…」

まずまず作家のイメージから離れていってしまい、少々拍子抜けした感じの声で俺がそう言うと、天野のやつは律儀にそれに答えてくれた。

「本名なんですか？」

『薫風の丘』

そう言ってわずかに首を傾げてみせる天野。その仕草はなかなか可愛い感じがして、思わず自分の口元がゆるんでしまうのが分かる。

「ま、どっちでもいいか」

わざと軽い調子で天野にそう答え、俺はためらうことなく表札の近くにあったインターホンのボタンを押した。

すると、すぐに反応があった。

『どちら様ですか？』

インターホンから聞こえてくるのは男性の声。

聞いた感じでは中年くらいで、そのしゃべり方は柔らかい物腰だ。これが高木隆太郎だとしたら、少なくとも声の印象は悪くはないな。

「すみません、水の星舎ほしの方から紹介があったと思うんですが……」

俺が手短に自分たちの素性を話そうとすると、それを男性の声が途中でさえぎった。

『ああ、伺ってます。ちょっと待っててくれますか？』

何となく出ばなをくじかれた気がしたが、ここは素直に従うしかない。と、俺と天野がそのまま玄関の前で待っていると、やがて玄関の戸が開いて男性が姿を見せた。

長身で大柄な感じの、初老の男性。

初老……俺が思ったのは、その髪の毛のほとんどが白くなっていたからだ、一部はまだ黒い髪が残っている。

「どうも初めまして、わたしが高木隆太郎です」

さっきのインターホン越しのものと同じ声とともに、その男性……高木さんは軽く頭を下

『薫風の丘』

げた。

「あっ…あの、俺は相沢祐一って言います。こっちは…」

「またもや機先を制された感じがして俺は柄にもなくあわてて頭を下げて、高木さんに答えながら、天野の方を見てみると、

「初めまして、天野美汐です。今日はお忙しい中、お時間を頂いて申しわけありません」  
相変わず天野はいつもの調子で高木さんに答えていた…。何と言うか、こう言った場面では妙に頼りになるな、こいつは。

だが、その天野の丁寧な挨拶をされた相手の方、つまり高木さんはそれに対してかすかに笑ってみせるだけだった。

「あ、いやいや、そんな堅苦しい挨拶も、ここで立ち話することもないですから、まずは上がってくださいな」

その外見と言い雰囲気と言い、どうしても作家と思えないのだが、思ったよりも話しやすそうな人なのはありがたい。

「お邪魔します」

ひとまず俺は高木さんの言葉に従うことにして、高木さんの促すままに家の中へと入っていった。

そして、俺と天野は入ってすぐの部屋…たぶん応接間に案内されて、またしばらく待たされることになった。と言うのも、高木さんが「お茶菓子を用意するから待っててくれませんか」と言い残して、出ていってしまったからだ。

そんな風に気遣いをされるのは俺たちとしては不本意なことだったのだが、かと言って

それを断るのもよくないかも知れない。お互いにそんなことを思っていたのか、俺も天野も高木さんには何も言えずにただ待つていた。

それからしばらくして、お茶とお茶菓子を乗せたお盆を持った高木さんが応接間に姿を見せた。

待つてる間に他に人がいそうな気配はしなかったし、こうして高木さんが自分で持つてくるつて言うことは、高木さんは一人住まいなんだろう。でも、その割に部屋の雰囲気にしても、高木さん自身の雰囲気にしても、生活感をあまり感じない。何て言うか、なかなか粋な人かも知れないな。

「まずは久しぶりに若い方々とたわいのない話でもしたいものですが、構いませんかね？」

お茶菓子を俺たちに勧めながら、高木さんはそう言つて微笑む。

さすがに本題をいきなり切り出すのも何だし、こうしてもてなしを受けている以上それを受けないのも失礼だし、何よりもそんなのは粋じゃない。

「つまらない話でよかつたら、いくらでも付き合いますよ」

そう言いながら俺は、高木さんに合わせるように笑つてみせる。

その後しばらくは世間話みたいなたわいのない話を続けていたが、三人のお茶が綺麗になくなった頃になつて、ようやくと言うか見計らつたように高木さんが切り出した。

「さて、と。どんな話をお知りになりたいのですかな？」

高木さんの方から本題を訊かれた形になつてしまつたが、そこで俺がちらりと天野の方を見ると、俺に向かつて小さくうなずいてみせる。要するに、俺に任せると言うことだな、



『薫風の丘』

これは。

「えーと…実はこの…『ものみの狐』と言う本なんですけど…」

天野の無言の同意を得て、俺は鞆の中から『ものみの狐』の本を取りだして見せると、わずかに高木さんの表情が険しくなったような気がする。

「はい」

短く答えると高木さんは目を閉じて、軽く腕組みをする。が、それがどのような意思の表れなのかは、残念ながら俺には分からない。

「この本に書かれている内容って…古くから伝わる民話を集めたものですよね？」

狐たちの色々なことを知ってるのか…なんてストレートな質問ができるはずもなく、俺が当たり障りのない言葉でそれだけを訊くと、高木さんは腕組みのまま、目だけを開けて俺に答えてくれる。

「ええ、それはわたしが色々と訪ね歩いてまとめたものを、地元の出版社に刊行をお願いしたものでしてね」

「お願い？」

「はい、恥ずかしい話ですが、この本は出版社から企画があったわけではなく、わたしが無理にお願いしたものだったのですよ」

「どうしてです？」

「今さらこんな民話集なんて出しても、出版社としては発行部数を見込めないですからね。ものみの丘の狐の話と言うのは、確かに土着の民話ではありますが、どの話にしてもあまり面白くないでしょう？」

面白みがない話と言えば、確かにそうかも知れない。俺だって真琴のことがなければ、この本を手を取ったりはしなかったかも知れないだから。

それでも、これを真琴が気にする以上はこの本に、そして目の前にいる高木さんには何かあるはずだ：俺はそう思って、高木さんがどんな反応を返すのか期待して、逆に訊き返すことにした。

「それは確かにそうかも知れないけど：そんなに面白みに欠けますか？」

だが、高木さんの反応は俺の期待とはかなり違ったものだった。

「狐が人々を苦しめるような話ばかりですよ。本を読んでいるのなら、分かっていただけだと思いますが」

苦笑混じりに困ったような表情で、そう答える高木さん。

その表情を見た時、俺は直感した。

この人は俺が：俺と天野が期待したような人物ではなかったのだと。

本当のところ、真琴が気にしたことを含めて、この高木さんには色々な期待があった。俺たち以外に狐のことを知ってる人がいたのかも知れないと言う期待。それも、俺たちとは比べようもないほどに、色々なことを知ってる人が。

だけど、それは俺の勝手な思いこみでしかなかった。

今、俺の目の前にいる高木隆太郎と言う人物は、少々変わり者ではあるかも知れないけど、狐のことを理解してような人物ではなかったのだ。

高木さんの返事を受けて、俺がどう言ったらいいのか分からないまま黙っていると、それまで黙っていた天野がそつと言葉を発した。

『薫風の丘』

「……でも……あその狐たちは……」

天野のつぶやきのような言葉に高木さんが反応する。

「はい？」

「この本に書かれているような……恐ろしい存在なんかじゃないって……」

天野は相変わらずうつむいたままそれだけ言うと、俺がさっき置いた『ものみの狐』の上にそつと手を置いた。

その時の天野の気持ちがどんなものか……なんてのは、よく分かっていた。実際にその狐たちと出会い、悲しい別れを経験している俺たちには、あそこにいる狐たちは……恐ろしい存在なんかじゃない。

「天野……」

言いたいことは分かっている……と言う含みで、俺はそつと天野の方に声をかけた。

が、その時。

それまで腕組みをしたままだった高木さんが机の上に手を下ろして、『ものみの狐』の方を見つめながら、静かに訊き返してきた。

「どうして、あなたはそう思うのですか？」

「え？」

突然の問いかけに天野は顔を上げて驚いていた。

そりゃ無理もない。その質問は俺たちにとっちゃ、そう簡単に答えることができないたぐいのものだったし、そもそもそんな風に高木さんに訊き返されるとは思っていなかったから。

『薫風の丘』

「人々が苦勞して作った道を壊し、田畑を荒らし、幾人も命を奪った狐が、恐ろしい存在ではないと思いますか？」

丁寧な言い方ではあったけど、高木さんの言葉には何だか含みがあるようにも感じられた。それでも視線を高木さんからそらすように天野はうつむきながら、控えめにではあるが反論する。

「…それは昔話にすぎません」

「昔話は昔話、確かにそうです。でも、それが狐の仕業として語り継がれたのは、狐が昔から人々を苦しめた存在であったことの証ですよ。もちろん、あそにいる狐たちが本当に災厄をもたらしたと言ってるのではなくて、そう言う存在として見られる要素は狐の方にもあったと言う意味です。分かりますか？」

高木さんの言いたいことは、俺にもよく分かった。

だけど、それを理解すればするほど、高木さんがただの人であることを思い知らされるだけで、さらに言えば、真琴やあの丘の狐たちのことを否定されるだけだ。

「……でも」

俺はすでに何をどう答えればいいのか分からずに黙っていたが、それでも天野は言葉を止めなかった。

「でも？」

「あその狐たちは……人の温もりに憧れて……だから……」

言葉を詰まらせながらの天野のささやかな抵抗は、高木さんにとっては大した意味を持たなかったらしく、高木さんは小さく苦笑をしてからなおも言葉を続けるだけだ。

『薫風の丘』

「狐が人の姿になるのは、人々に紛れて翻弄するため。ですから、それは人心不安の中に生まれた寓話にすぎないと解釈しています」

高木さんが喋り終えた時。

天野は不意に立ち上がるようにしながら、叫んでいた。

「そんなことっ……ないっ……」

俺はとっさに天野の肩を押さながら、なだめるように声をかける。

「天野っ……」

その時、天野の肩は大きくふるえていた。たぶん、それまで抑えていたものがたまらなくなつて、思わず取つてしまった行動だつたらう。

だけど、この場でその勢いのまま天野を放っておくわけにはいかないのだ。こんな感情的な天野は本当に珍しいし、それだけ想いが募っていたのは分かるけど、それを高木さんにぶつけてもしょうがないし、それよりもこのままでは天野自身がもたないに決まつてる。

「どうしましたか？」

高木さんは特に怪訝そうな表情も見せずにいてくれたが、それはたぶん大人の対応と言うやつだろう。だが、こっちもこれ以上体面を繕っている余裕はなさそうだ。

「あっ……いえ、すみませんが、ちょっと調子がよくないみたいで……。今日はこれで失礼したいと思います」

かなり失礼な言い方になつたかも知れないとは思つたが、この際しようがないと割り切つて、俺が早々に退散する意思を見せると、意外にも高木さんはそれにあっさりと応じてくれた。

「そうですか。それでは、また話が聞きたいようでしたら、いつでも来てくださって結構ですから」

そう言う高木さんの表情は最初に会った時と同じような微笑みで、それまで天野とのやり取りの時とは別人に思えるくらいなのが印象的だった。

「はい、すみません」

それが社交辞令かどうかはともかくとして、この場はその笑顔を信じて俺は天野を引き連れるようにして、応接間から出ていく。

「…わたしっ……」

「いいから」

天野はまだ何かを言いたそうな表情を見せるが、俺は小さな声で天野に耳打ちすると、今度は高木さんに向かってぺこりと頭を下げながら言う。

「それじゃ、本当にすみませんでした」

俺たちが高木さんの家を出るまで、高木さんは別に不機嫌そうな表情を見せることはなかったが、俺は何度も何度も頭を下げていた。

そして、俺は高木宅からかなりの距離を、天野の肩を押さえたまま歩き続けていた。天野はまだ何かを言いたそうな感じだったし、そのまま手を離せば、すぐに高木宅に一人で引き返していきそうでもあったからだ。

しばらくそのまま歩いていると、段々と天野の抵抗がなくなってきたので、俺は天野の肩から手を離して、向き合うようにしながら声をかけてみた。

「どうしたってんだよ？ 急に声を上げるなんて、お前らしくないぞ」

別段非難するつもりで言ったわけじゃなく、むしろ俺は軽い調子で訊いてみたのに、天野の返事は低く重いものだった。

「……相沢さんは……相沢さんは平気だったんですか？」

「平気って……」

高木さんが期待したような人物でなかったことは、残念だったと思う。だけど、平気かどうかと訊かれても、俺にはどう答えていいか分からなかった。

「あの子たちのことが……寓話だなんて……作り話だなんて……言われて平気だったんですか？」

「……天野」

その時の天野の表情は、まさに沈痛な面持ちと言う表現がぴったりで、天野がそんな表情で声を詰まらせながらも言いたかったことは……俺にも十分伝わっていた。

「わたしは……あの子の温もりを……忘れた日はありません……」

天野が今、どんなことを思っているのか、それを口に出しているのか。それがどれほどの重みを持つのか。そのどちらにも俺にはよく分かっていた。だから、俺はそれ以上は何も言えなかった。

「……」

「あの子の笑顔も仕草も声もっ！ 決して夢なんかじゃなくてっ……それは……確かに……一緒に……いっ……」

俺が黙ったまましていると、天野の声が次第に高くなっていく。と同時に、天野の視線が俺を真正面にとらえ、その両手が俺の二の腕をぎゅっと握りしめるようになった。

『薫風の丘』

「天野」

俺の腕をぎゅっと掴んだままの天野の手をそのままにして、俺は右手をゆっくりと上げていき、言葉を詰まらせた天野の頭にそっと手を乗せた。この次に天野が言葉を詰まらせたら、俺が何をするべきかを考えながら。

「いたんですよっ！　なのに、なのに……あの人は……」

天野は俺の腕がどんな状態になってるのかなんて、全然気にする素振りを見せずに、声だけが高くなっていく。

はつきり言っちょつとばかり腕が痛かった。

だけど、それはそれだけ想いが深かったことの証でもあるわけだ。だから、俺は余計なことは何も言わずに、ただひとことだけ返す。

「分かってるって」

それは見当違いな言葉かも知れない。でも、俺にはそれ以外に言う言葉はなかった。

だって、俺には真琴がいるから。つらい別れの後、ずっと心を閉ざしていた天野と違って、俺には天野もいてくれたし、真琴が戻ってくれたから。

天野が一人でどんな想いを抱いたまま過ごしてきたかなんて……俺には正直言っただけ分らない。だけど、少なくとも天野はもう一人じゃないってことだけは本当のことで、それだけは俺も分かっている。

だから……。

「なのに！」

「俺は分かっているし、俺だけじゃなくて、秋子さんだって名雪だって……真琴だって、ちゃ



んと本当のことは分かっているから、な？」

「なっ……ぐっ……」

一際声を上げたかと思ったら、大きく声を詰まらせて……天野は何も言わなかった……いや、俺が言えないようにした。

さっきから考えていた通り、俺は天野の頭をそっと自分の肩に押し当てるようにして、そこで天野の言葉をさえぎったのだ。

その後は……もはや俺が何を言うこともない。ただ、俺のされるがままに天野は肩に顔を押しつけたまま、体をふるわせているだけだった。

—\*—

黒耳は丘に戻ってはいなかった。

後ろ足にまだ痛みがあったが、痛む足をかばって動くことは可能だった。

だが、黒耳は丘には戻らなかった。

戻りたくないわけではない。

戻れないわけではない。

黒耳を引き止めていたのは、あの日に出会った物を言えぬ娘だった。

いや、正確には娘が黒耳を捕縛したのではないし、黒耳が何か弱みを握られたのでもない。

何故？

それが黒耳が未だに森にいる理由のすべて。

何故、自分はここに残っているのか。

何故、自分はこの娘のことが気になるのか。

黒耳の理解を大きく超える存在……それが、あの娘だった。それ故に、黒耳は丘に帰ることも、他の村人に見つかる危険も顧みることがなかった。

何故、娘は自分を助けたのか。

村人に追われて崖を飛び降りた時に、すでに覚悟はしていた。だが、娘は黒耳に藁草を施し、他の村人を連れてくることもなかった。そればかりか、毎日黒耳の様子を見に来るようになり、多少なりとも食い物まで持ってきていた。

何故、娘は毎日欠かさず自分に食い物を持ってくるのか。

未だに足が治りきっていない黒耳だが、実のところ人間に食い物を供されるほど動けないわけではない。だが、黒耳が動こうとすると決まって娘が両手で黒耳を押さえつけるようにしてしまうのだ。

何故、娘は自分のことを笑顔で抱き締めるのか。

いつ見ても娘の格好は粗末な物だったが、何故か表情だけはいつも笑顔だった。黒耳には人間の美醜の感覚などと言うものは理解できなかったが、少なくともその笑顔だけは誰よりも綺麗で、何と言っても不思議な暖かみがあると思つた。さらに不思議なことに、自分が娘にそつと抱かれていると、言いようのない心地よさと安心感を得られたのだ。

その日もいつものように娘がやってきた。

だが、その日はいつもと少しだけ違っていた。

草木をかき分けるようにして、黒耳のいるところに娘が姿を見せた時、黒耳は娘から放たれた異臭にびくつと身をふるわせた。

物を言えぬ娘がそれを見て、笑う。

だが、それはいつもの笑顔ではない。

黒耳は直感的にそう読みとった。

それでは、今の笑顔は何だろうか。

すぐにその答えは出た。

黒耳が娘に出会った時と同じような表情。

それは、寂しさと悲しさを含んだ笑み。

何故、そんな表情をするのだろう。

黒耳がそう思っていると、娘は食い物だけをそっと置くと、同じ表情のままじりじりと後じさりをする。

その時、黒耳はとっさに立ち上がって、娘の方に走り出した。まだ痛い後ろ足のこと、異臭のことも意に介さずに。

何故そうしたのか、黒耳には分からなかった。

だが、何故かそうしたかった。

いや、自分はそうしなければいけないような気がした。

何故そうしなければいけないのかのは、まったく分からない。だが、少なくとも娘にその表情をさせるのは、ひどくいやな気分だった。

そして、黒耳が娘の方に一気に近づくと娘は驚いた表情を見せて、今度は娘の方から黒

耳に近づいてきた。

娘が黒耳に近づくと、やはり先ほどから感じる異臭がひどかったが、黒耳はそんなことは気にせずに、そのまま娘の顔を鼻先でつくつくようにしてみせる。

黒耳が顔をつつくようにすると、娘は困ったように笑ってそれに答え、そのまま黒耳の後ろ足をそっと撫でていた。

すると、やはり黒耳の足からは痛みがずっと引いていくような気がする。

心地よい。

何故、娘に触られるところも心地よいのか。

黒耳の疑問は増えこそすれ、一向に減ることはなかった。だが、娘が黒耳の体をそっと抱き締めると、それらの疑問など大したことはないようにも思えてしまう。

それほどに心地よいものだった。

しばらくそのままにしていた黒耳だったが、娘の体をよく見てみると異臭のもとが何なのかを理解した。

それは娘の頭から肩に至るまでついていた糞尿らしきもの。少なくとも自分たち狐のものではないことは分かる。

恐らくは人間のもの。

何故、そんなものが娘の体についているのかは分からぬが、少なくともそれは自分だけではなく、娘にとっても心地よいものではないことくらいは黒耳にも理解できた。

どうすればいいのか。

そんなことを考える自分に対して疑問など感じることなく、黒耳はすぐに結論を出した。

洗い流せばいい。心地よくないものなど、流してしまえばいい。そうすれば、先ほどのような表情はしなくてすむ。

そう思って黒耳は立ち上がった。

娘が触れていてくれたおかげか、後ろ足の痛みはさほどのものではなく、黒耳が苦痛に顔をしかめることもない。

娘は突然の黒耳の行動に戸惑いを見せていたが、黒耳を押さえつけるようなことはしなかった。そして、黒耳が歩き出すと、娘もそれにつき従う。

黒耳は娘の方を時折振り向きながら、自分にも娘にも無理のない歩みで森の中を進んでいき、やがて目的の場所にたどり着いた。

黒耳が案内したのは、山からの冷たく澄んだ流れが湧き出ている森の中の小さな泉。

そこまで来ると娘も黒耳の行動の理由を悟ったらしく、黒耳に向かって小さく笑った後、泉の水を手ですくい、顔を洗い始めた。

静かな森の中に、娘の手による水音だけが響く。だが、何度か水をすくった後、娘は手の動きを止めてしまった。

黒耳がどうしたのかとのぞき込むようにすると、娘は笑って見せる。

それが何の意味なのかは黒耳には分からなかったが、ややもすると娘は身に着けていたものを脱いで、泉の中へとその裸身を投じた。

泉の水はこの上なく綺麗なものであったろうが、全身に浴びるには冷たすぎるはずで、黒耳でさえも泉の中に身を投じることはなかったほどだ。

とっさに黒耳は己も泉の中に入ることを覚悟して、娘の様子を伺った。すると、黒耳の

心配をよそに、娘は平気な素振りです泉の中で自身を洗っていた。黒耳に対していつも見せる笑顔のままで。

何よりも娘自身が心地よいと感じているのなら、己が心配することもあるまい。娘の表情を見てそう思った黒耳だったが、それでもずっと泉のほとりから娘の様子を伺っていた。

娘は自分の体だけでなく、先ほどまで着ていたものも泉の水で洗ってから、まだ濡れているそれを羽織りながら泉から上がってきた。

泉のほとりに腰を下ろした娘に、黒耳はそっと近づき己の毛で娘の体を拭くように、小さく動かす。

娘の体はすっかり冷たくなっており、どうしてこれで平気であつたのか黒耳は不思議に思った。と同時に、冷えてしまった娘の体を暖めるように、さらに体を近づける。

すると、娘が突然に黒耳の体を抱き締めた。

ともすると、苦しいくらいの力加減だったが、黒耳はそれに抗うことはしなかった。そして、それまでずっと笑顔でいたはずの娘の顔が当たる辺りがほのかに暖かくなっていくのを感じた。

冷たいはずの泉の水ではなく、ほのかに暖かいもの、それは涙。

何故娘が涙を流しているのかは、やはり黒耳には分からないが、こうしていることは決していやではない。

黒耳はそのまま娘のされるままにじっとしていたが、足の具合がよくなったら、娘が人間の村でどのようにしているのか見てやろうと考えていた。

『薫風の丘』

そして、それが叶ったのは風の心地よい季節もすぎ、雨の多い季節になった頃のことだった。

—\*—

また…だ。

また、あの夢だ。

さっぱり覚えてないんだから、本当に同じなのか分かるはずがないのに…昨日と同じような夢を見た…そんな気だけはする。

一体何だっつんだ、ホントに…。

それでも、昨日に比べたらそんなに悪い気分にはないっていいし、重苦しい感じもない。よく覚えてないってのは相変わらずだが。

相変わらずと言えば、やっぱり誰かが俺に話を聞かせてくれた…そんな感じだけは残っている。それも、どこかで聞いたような声。もともと、夢の中に出てくる声なんてのは、どこかで聞いているに違いないのだから、それは当たり前だ。ついでに言うと、それが誰かなんてことも特定できないのだからどうしようもない。

やれやれ…と、気を取り直すように改めて周りを見てみると、今日は真琴の気配も姿もなかった。さっきの夢が特にイヤな感じではなかったと言うのもあるだろうけど、昨日あれだけ言われた真琴が懲りずに来るってのもちょっと考えにくい。

何はともあれ、いつもとさほど変わらない時間にベッドから起きあがると、俺はいつも

『薫風の丘』

のように身支度を整えた。

俺が食堂に顔を出すと、珍しくそこには真琴と名雪の二人が揃っていた。

「おはよう、祐一」

「祐一、遅いっ！」

あれ？

「真琴と名雪がいるように見えるけど、これは悪い夢の続きか？」

思わず時計を確認しながら、本心でそう言った俺だったのだが、途端に真琴の表情が怒りに変わる。

「何よう！」

「いや、だってな……」

この二人が俺よりも早く起きてここにいること自体が、かなり少ない……と言うか、今まであったのか……と言うくらいなのだ。

「真琴だってちゃんと起きるわよう！」

相変わらず口を尖らせている真琴はこの際無視して、まずは名雪に向かって話を続ける  
としよう。

「名雪、お前は珍しいじゃないか。どうしてこんな時間に？」

すると、少しだけ名雪の肩じりが下がる。

「そんなことないよー」

「こらあ、無視するなあっ！」

「そうか？ ……って、そうか、昨日担任に何か言われてたよな、お前」



『薫風の丘』

「うっ……別に用事がある日だけ早く起きるってわけじゃないよ」

正直なやつって言うか何と言うか……。自分ではつきりと答えをばらしてどうするってんだよ、ホントに。

「別にそこまでは言っていないけどな、俺は」

「あっ……」

「あうーっ！ 真琴を無視するなって言ってるじゃないのっ」

「こうして起きられるなら、いつもそうして欲しいもんだけどな」

「うー……いつもは…用事がないからいいんだよ」

「そうは言っても、秋子さんの苦勞を考えてみるって。ねえ、秋子さん？」

と、そこで俺はそれまで台所で支度をしていた（と思われる）秋子さんに向かって同意を求めた。

「そうですね、いつもこんな調子だったらわたしも楽ですけど……」

片手にトーストの載った皿、もう片方の手に俺のマグカップを持ちながら、秋子さんはいつもの笑顔でそう答えた後、持ってきた物をテーブルに置くときさらに言葉を続ける。

「それはそれで寂しいかも知れないわね」

名雪の方をちらりと見ながら、そう言う秋子さんの表情はやっぱり笑顔のままだったけど、ほんの少しだけいつもとは違った何かがあった。

「まあ、確かにいつもこうだったら、それは名雪じゃねーからなあ……」

秋子さんの言葉と表情で納得した俺が、ぼそっと漏らすようにつぶやくと、

「でしょ？」

『薫風の丘』

と、秋子さんもそれにうなずきながら短い返事をしてくれた。一方の名雪はまだ納得していないような表情のままだ。

「うみゆ……」

「まあ、細かいことは気にするなって。別にお前が悪いとか言ってるんじゃないし、普段のお前の方がらしいって言ってるだけだから」

「うーん……まあ、いいかな？」

「そうそう。それよか、せっかくの朝飯が冷えちまう前に頂くとしようぜ？」

とりあえずは名雪も納得したようなので、先ほど秋子さんが持ってきてくれたトーストとコーヒーに視線を移して、さっそくそれを頂こうとした時。

「ちょっとお！」

穏やかな朝の風景には似つかわしくない、不機嫌さをこれ以上もないくらいに纏っている怒号が響いた。

声のした方を見るとそこには、俺をにらみつけてる真琴の姿。

…そうだった、そうだった。

無視してすっかりそのまま忘れちゃったけど、真琴がギャーギャー騒いでたっけ…。

「真琴をすっかり無視してるけど、ここには真琴だっているんだからねっ」

しかしまあ、怒ってる割には、言ってることが可愛いもんだ。それに、さっきと少し論点がずれているような気もするのだが……。

「あ、ああ、いるのは知ってる。これでも、ちゃんと起きてるからな」

「ホントにいい？ さっきも変なこと言ってたけど、祐一はまだ寝ぼけてるんじゃない

『薫風の丘』

の？」

いつものことと分かっていいるのか、あるいはあきらめていいるのか、名雪も秋子さんも真琴を止めようとはしない。この場合の攻撃対象はあくまでも俺だし、時間がないわけでもないから、楽しく見守っていると言うところだろうな。

俺だって真琴とけんかしようとは思ってないし、真琴が怒っているとしても、それを一気に冷ますだけの切り札もちゃんとう意してある。

「変なことって何だよ」

「さっき言ってたじゃないの、『悪い夢の続きか』って」

「ああ、確かに。でも、それは絶対じゃないって」

俺が至って冷静に返すと、真琴はブンブンッと派手に両手を動かしながら、声を上げる。そう言えば、こいつは感情的になるとどうもアクションが大きさになりがちだよな。

「何でそう言えるのよっ」

「よく考えたら悪夢ってのは、お前がおしとやかになっていたり、おとなしく勉強したり、人の言うことをちゃんと聞いたりするようなやつだった」

「な、何よう、それっ！」

「だから、こんな風にやかましいままの真琴がいてるってことは、残念ながら悪夢でも何でもないってことなんだよな」

「どう言う意味よっ！」

真琴の声がさらに上がる。さすがにこれ以上からかっていると、止められなくなりそうなので、ここいらで切り札を使うことにしよう。

「まあ、それはともかくとして、今日辺りに例の本の著者と会いに行こうと思うのだが、お前はそれまで勉強してろよな」

「え……」

俺がそう言った途端、真琴はそれまで派手に動かしていた両手をびたりと止めて、きょとんとした表情で俺を見つめているだけ。まさに切り札の効果はてきめんと言うところだ。「だから、『ものみの狐』の高木さんに会いに行くぞ」

正確には『ものみの狐』の著者である高木隆太郎さんに……となるのだが、これで意味は通じるはずだし、特に意識して言ったわけでもなかった。しかし、真琴は不思議そうな表情でそれに答えていた。

「え？ それって……黒耳さんのこと？」

黒耳？ 何だそりゃ？

俺は「高木さん」と言ったはずで、一体真琴のやつはどこをどう聞いてるってんだ……？ 待て待て。黒耳ってのは、どこかで聞いたような感じがする。ずいぶんと馴染んでいた、誰かの名前のような……。

不意に自分の中に湧いて出た妙な感覚に動かされるまま、俺は真琴に訊き返した。たぶん、怪訝そうな表情で。

「今、何て言った？」

「え……真琴、変なこと言ったかな……」

真琴の返事はひどく頼りない調子だった。真琴自身も自分の言ったことの意味がよく分かっているかのように。……いや、たぶん、真琴も分かっているんだらう。

『薫風の丘』

「いや、やっぱり何でもない」

「うん……」

真琴の表情からすると、「よく分かってないけど、それはとても大事なことのような……そんな気だけはする」と言う感じに違いない。と言うのも、妙な話ではあるが俺自身がそう感じていたから。

「で、高木さんのところに行くって言う話なんだけどな……」

黒耳と言う言葉は確かに気になっていたが、かと言ってそのままお互い呆けていてもしょうがない。と言うわけで、俺が話を切り出すと真琴も小さくうなずいた。

「うん」

「学校出る前に一度電話するから、お前は駅まで来てくれるか？」

「うん、いいけど」

「いいけど、何だ？」

「本は？」

「あつ…そうか、まだ読んでいなかったんだよな」

「うん」

これは困った。と言うのも、あの本（もちろん『ものみの狐』のこと）は、今は俺の手元にはなかったりするのだ。それは、この場に持ち合わせていないと言う意味ではなくて、俺の部屋にも鞆の中にもないと言う意味でだ。

「昨日、忘れてきちゃった」

「忘れたって、どこに？」

『薫風の丘』

「その高木さんトコ」

「ふーん…それじゃ、しょうがないね」

もしかしたら怒り出すかも知れないと思っていたのに、どこか真琴らしくない返事。そう言えば、さつきからずつと真琴はこんな調子で、いつもより何かが一本どころか数本抜けている感じがするくらいだ。

「ま、まあな」

「うん、じゃあ、電話待ってる」

やっぱりいつもと違う妙にしおらしい真琴の返事。かと言って、別に悩んでいるとか落ち込んでいるような気配はない。とにかく、よく分からない状態と言うのが正解だ。

「ああ」

そんな真琴の態度が気になったものの、俺がそこで不安そうにしているはかえってよくないと思つて、そこで話題を打ち切るように短く答え、目の前にある朝食へと再び意識を向けた。

—\*—

昼休み。

俺がいつもの場所に行ってみると、そこにいつもの小さい背中を窺見するこ  
とができた。昨日のことを思い返すと、もしかしたら今日はいないかも知れな  
いとさえ思っていたのに、正直言って少しだけ安心した。

『薫風の丘』

「よお、元気かよ」

天野がどんな様子でいるかがよく分からない以上、俺が余計に深刻ぶっちゃ意味がない。そんな思惑もあって、俺はわざと軽い口調でその背中に声を掛けてみた。

が、天野は背中を向けたまま、返事をしようとはしない。もしかして、まだ昨日のことを気にしてるんだろうか。

「天野？」

「……元気です」

もう一度声をかけると、ようやく返事があったが、その内容とは裏腹な元気のない声だった。

「その声で元気です……って言われても、説得力に欠けるよな」

「すみません」

「いや、謝る必要はないって。……やっぱり昨日のことが気になってるのか？」

天野は一度だけ小さくうなずいたものの、それ以上は何の行動も示さない。まあ、当然のことだとは思っていたが、天野がここに姿を見せているのは少なくとも、俺がここに来ることも分かっていたから……だと思いたい。

学食で買ってきたパンの包みを開けながら、俺は天野の横に座った。照れとか気恥ずかさとかあって、いつもはそんな風にしたことがあまりないが、今日はそんなことを気にしてる場合じゃないからな。

「俺さ、最近変な夢を見るんだよ」

『薫風の丘』

それだけ言つて俺はパンを一口かじり、それを飲み込むまでの間は言葉を続けずに、天野の様子を伺つてみた。

相変わらず元気がなくうなだれたままで、小さなランチボックスはご飯とおかずが綺麗に詰め込まれた状態だった。ここに来てはみたものの、食べるほどの元気もないつてことか…。

「変な夢…つて言つても、俺自身がよく覚えてないんで、本当に変かどうかも分からないだけだな」

いきなり関係ない話を切り出したのは、昨日のことを必要以上に蒸し返すこともないだろうし、さしあたって面白そうな話題が見つからなかつたからだ。

まあ、予想通りと言うか期待はずれと言うか…、天野の様子に変化はなく、俺は苦笑混じりに言葉を続けた。

「何かの話を誰かが聞かせてくれた…そんな感じなんだけど、そのくせに妙にリアルな感じがして、その夢の中で苦しいことがあつた日にゃ…」

と、俺はそこで一旦言葉を止めた。変な夢を見た最初の日、いきなり真琴がそばにいたことまで話す必要があるのか、ちよつとためらつていたからだ。が、そんな風に俺が言葉を切つたままにしていると、

「…わたしは今でもあの子の夢を見ます」

と、うつむいたままの天野が小さな声で切り出した。

「そうか」

俺が相づちを打つと、天野は俺の方に向くことなく喋り始める。



『薫風の丘』

「以前はそれは悲しい…悪夢でしかなかったです。いくらわたしが呼びかけてもあの子はただ笑っているだけで、わたしの方に戻って来てくれませんし、目が覚めればそれで終わりでしたから」

天野の声には昨日ほどの切迫したものはないが、やっぱり切実な思いと言うのは、それを語る天野の表情から容易に読みとれた。

「でも、相沢さんと真琴と出会って、真琴の笑顔を見た時から、それは悪夢じゃなくなりました」

「それはよかった…と、言っているのかな？」

「確かにわたしは真琴と相沢さんに救われたと思っています。でも、本当のところを言うと、わたしは相沢さんが羨ましい…いいえ、妬ましくらいです。どうしてわたしのところには帰って来てくれないのって」

「天野…」

「分かっているんです、悲しんでいるだけじゃ何も起きないと言うことは。それにわたしはあの子も真琴も相沢さんのことも好きだから、これでいいんですよ…」

そう言って、最後に少しだけ笑う。笑うと言っても、かすかに口元が動いたくらいでしかなかったが、少なくとも今の天野にはそれで十分だと俺は思う。

「そうだな、とりあえずはそれでいいよな」

俺がわざと冗談めいた口調で返すと、今度は天野も普通に答えてくれた。

「とりあえずと言うのはよくないですよ」

「まあ、気にするな。それくらい言い返す気力があるなら、その綺麗に残っている弁当を

『薫風の丘』

あけちまえて」

「…そうですね」

そう答えながら、天野は何となく納得していない表情をしていた。何が気になっているのか、ちよつと俺には分からないが…。

「別に茶化してるつもりじゃなかったんだけど、お前の気に障ったんなら謝るよ、ゴメン」

「いえ、そんなわけじゃないですから…相沢さんが謝る必要はありません」

と答える割には、天野はやっぱり釈然としない様子だったりする。

「とりあえず…って言ったのが、そんなに気になったのか？」

「あつ…いえ、ですから、そのことはもういいんです」

「おや？ 気のせいかな、天野の顔が赤くなってるような…。」

「お前、何顔を赤くしてんだ？」

「な、何でもありません」

俺に指摘されると、天野は一層顔を赤くして、縮こまってしまった。

一体何を恥ずかしがってるんだか…さっぱり俺には分からないけどまあ、こんな天野もなかなか可愛くて結構じゃないか。

って、そうか。昨日俺の前で泣いたことを改めて気にしてるのかも知れないな…。

「昨日のことが恥ずかしいってんなら、俺も忘れるよ」

「あ、いえ…それはそんなに気にしてるわけではないんです…」

「昨日のことじゃない？ じゃあ何を気にしてるんだ？」

『薫風の丘』

あっさりと期待を裏切られ、思わず俺は反射的に天野に訊き返していた。すると、天野は複雑な表情で黙りこくってしまった。

「天野？」

呼びかけても返事はない。

このままではどうしようもないとは思うが、天野の気にしてることが俺には全然分からないのだから、それこそしょうがない。

半ばあきらめながら、おとなしく俺は天野の出方を待つことにした。

そして……そのまま時間だけが過ぎていく。

正確な時間までは分からないが、恐らく三分程度はそうして黙ったままだったと思う。たった三分だぞ。大した時間じゃないはずだが、空気が重い……。

駄目だ……これ以上は俺が耐えられない……。

と、俺が観念して、その話題を打ち切るべく、言葉を発しようとした瞬間。

「あの……」

控えめではあるが、ようやく天野が口を開いたのだ。こうなりや、この後天野が何を言おうが構わない。俺としてはこの重たい沈黙を破ってくれたことそのものを高く評価して、つまらない話題は胸にしまっておくことにしよう。

「……いえ、やっぱり何でもありません……」

って……それで終わってしまったら、さっきよりも重くないか？ いや、重いよな、やっぱり。

「ま、あれだ。そんな風に言いにくいって思ってることは、無理に言わない方が健康にも

『薫風の丘』

いいし、何よりもお互いのためだよな」

格好悪かろうがみつともなからうが、この際ここで話題を打ち切るのが一番なのだ……と言う強い信念のもと、俺がやや軽めの口調で言うと、天野はすつと顔を上げた。そして納得したようにかすかに笑いながら、ひとことだけ返すのだった。

「そうですね……」

その後は、これと言って話題もないまま、お互いに昼食をひたすら食べるだけだった。

さっきの話題を打ち切ったつもりが、その後の話題すべてを打ち切ったことになってしまったのは予定外だが、それも仕方がないだろう。無理に今訊くことでもないだろうし、天野も気が向けば自分から言うに決まってる。

結局その日は、天野とそれ以上は大した会話をする事がなかった。

放課後になって、朝の約束通りに真琴に電話をして、これまた朝言った通りに駅で待ち合わせ。

そこまでは何もなく……いや、それ以後、真琴と一緒になくても、高木さんの家に真琴を連れていっても、驚くくらいに何ごともなかった。

いや、不思議なことと言えば、人見知りの激しい真琴が高木さんを避ける様子を見せなかったことと、真琴を見ている高木さんの様子が昨日とは別人のような感じだったことだ。特に、真琴のたわいのない世間話を聞き入ってる時の優しそうな笑顔がとても印象的だった。

雨の多い季節になった。

痛めた後ろ足の具合がよくなった頃、黒耳は娘が森から帰る時にその後をつけた。以前から気になっていたことを実行するために。

娘がどれだけ気をつけようと、黒耳がついてくるのを察知することは叶わぬ上に、そもそも娘はそんなことを警戒してはいなかった。故に、黒耳が娘の後をつけて、村へ入るのも造作もないことであつた。

だが、娘の暮らしざまを見た時。

黒耳は本当に驚いた。

村のはずれにある小屋、それが娘の住みからしい。だが、風雨をかるうじて防ぐ程度の作りで、狐である黒耳が見ても粗末な小屋程度にしか見えなかつたのだ。

どう言うことだろうか。

黒耳が疑問に思っていると、小屋の中に入ったはずの娘が背中にかごを背負つて小屋から出てきた。

そのままどこに行くのかと、さらに黒耳がそつと後をつけていると、娘は近くにある一軒の農家へと入つていった。

さすがに家の中まで入ることはためらつたが、それでもじりじりと農家に近づいていくと、奥の方から人間の怒号が響いた。どうやらそれは娘に向かって発せられたらしいが、何を言つてるのかまでは黒耳には分からない。

しばらくして、娘が何度も何度も頭を下げながら奥の方から姿を現した。よく見ると、奥の方に農家の女房らしき中年女性がいる。

何を怒っているのかは分からないが、その視線にしろ態度にしろ、娘のことをよく思っていないのは間違いない。そればかりか、どこか娘のことを毛嫌いしているようにも思える。いずれにしても、人間の考えることはよく分からない。黒耳はそう思って、その後も村での娘の様子を伺っていた。

しかし、見れば見るほど、黒耳には理解できないことばかりだった。

農家の女房だけでなく村の誰もが、娘に対してだけは冷たいのだ。老いも若きも男も女も、皆一様に。

娘と他の村人にどのような違いがあると言うのだろうか。

確かに娘の動きは機敏とは言いがたいものだが、娘よりも動きの鈍い者などいくらでもいる。

どんな仕事であっても、言われた仕事は真剣に取り組んでいる。娘よりも怠けている者など、それこそあちこちで見かけるではないか。

口が利けないと言うだけで、娘のどこが他者と違うのだろうか。狐たちでさえ、傷ついた仲間をいたわることは当たり前であるのに、どうして人間は少しだけ違っている者をこゝまで排除しようとするのか。

それから幾日もの間、黒耳は村へ娘の様子を見に行ったが、やはり黒耳には理解できなかった。

だが、黒耳にとっては、それはあまり大した問題ではなかった。

村人が何故忌み嫌うのか、人語を解することのない自分には分からないが、少なくとも自分と一緒に時は娘も笑う。

それで十分だと思った。

自分が娘と一緒にいれば、それでいいと。村人に疎まれるのなら、自分と一緒にいればいいと。

ただそれだけを思い、願っていた。

その年の雨はいつもよりも多く、そして激しく降り続いた。そんな黒耳のささやかな願いなど流してしまふかのように。

ある雨の強い日のこと。

いつものように黒耳は娘が来るのを待っていたが、その日はなかなか姿を見せなかった。これまで強い雨が幾度も降ったが、それでも娘はやってきていたはずだ。

妙な胸騒ぎがする。

黒耳は意を決して、娘のいる村へと駆り出した。

しばらくして、黒耳は村外れの街道を歩く村人の一団を見つけた。

それがどう言う趣向の一団かは分からないが、どの村人の顔も一様に暗い表情だった。

ふと、その一団のほぼ中央に黒耳の目が止まる。

娘がいた。

いつもなら自分のところに来ているはずの、物言わぬ娘が。

綺麗な白い着物に、それに見合うように綺麗にとかれた髪。普段のみすばらしい格好とは別人のような娘が。

『薫風の丘』

何をするつもりだろう。

暗く重い表情の村人たちは、娘をどこに連れて行くと言うのだろう。

またも妙な胸騒ぎがする。

思わず黒耳は村人の一団へ向かっていった。

無論、村人がそれに気付くが、そんなことに黒耳は構わない。ただ、娘のそばに行こうと思っただけだった。

村人が騒ぐ。

ある者はただ大声を上げる。

ある者は黒耳を打ち払おうとする。

だが、娘がそれを制するように手を上げた。

黒耳の中で膨らんでいた胸騒ぎは、なおも大きくなり続け、娘と向き合った時、それはどんよりとした不安へと姿を変えた。

娘が黒耳に寄ってくる。

よく分からない。よく分からないが、それはとてつもなくいやなこと予感がした。が、黒耳は動かなかつた。ただ、じっと娘が寄ってくるのを待った。

そして。

娘は黒耳をそっと抱き締めて、いつものように、一度だけ笑った。

分からない。

本当に分からない。だが、不安だけは一層強くなる。

困ったような笑みを浮かべながら、娘の体がゆっくりと離れた。



止めてくれ。このまま村人と娘を行かせてはいけない。

何かは分らないが、黒耳の中でそんな声にならない言葉が溢れている。

だが、そんな心の内とは裏腹に、黒耳は何もしなかった。できなかった。

やがて、村人の一団が動き出すと、黒耳はゆっくりとそれに従う。村人の何人が黒耳を見て、怪訝そうな表情を見せたが、特に追い払おうとはしない。

黒耳も村人の一団の後におとなしくつき従って歩く。

そして、街道のある場所まで村人の一団が止まった。

そこは数日來の豪雨で、街道の一部が崩れたしまった場所。

なおも暗い表情のままの村人が、何やら土を掘るような作業を始めた。

それを見て、黒耳の不安はますます強くなっていた。これから何がどうなるのかを考えると、その不安は大きくなるような気がした。

なおも黒耳がじっとしていると、村人の一団の中にいた僧侶らしき者が、手を合わせている。

その時、黒耳には村人の目的が分かった。

この連中は娘を生き埋めにするつもりなのだ。

理由など分らないし、仮に分かったところで黒耳にとっては理由など意味がない。とにかく、そのようなことを自分が許せるものではないのだ。

そう思って黒耳が、一番近場にいた村人の一人に飛びかかろうと走る。

にわかには村人が騒然とするが、それは長くは続かない。

激しい雨音にも負けないほどの、短くそして何よりも誰よりも切実な声はその場に響い

た。

叫んだのは、口の利けない娘。故に、到底まともとは言えない声。

だが、それを聞き取って、その意味を理解したのは、黒耳。

瞬時に黒耳は村人への攻撃を止めた。そして、じっと娘の方を見つめた。

娘はただ微笑みを返すだけ。

黒耳はそれからじっと見ていた。

娘が生き埋めにされるのを。

何故そうしているのか、自分にも分からない。

それでも、黒耳はじっと見つめていた。

村人がいなくなつた後も、黒耳は動かさずにじっと娘が埋められてしまつた場所を見つめていた。

それから雨は二日ほど降り続いたが、黒耳はそれでも動かさずにいた。

そして、雨がやんだ三日目の朝、黒耳は姿を消した。切なく長い鳴き声だけを残して。

—\*—

ふっと眩しさを感じた。

気がつくとき、そこは自分のベッドの上だつた。

時計を見ると、まだ七時前。起きるには少し早いくらいだ。が、その割には妙に意識だけは鮮明だつたりする。

『薫風の丘』

まあ、名雪と違つて寝起きが悪いなんてことはないが、何となくいつもと違うような感じがした。

夢……。

そうだ、夢を見ていたんだ。ここんとこずつと見ていたようなやつを……。だけど、それまでとは違つてどんな夢だったか……はつきりと思ひ出せる。

今日の夢ばかりでなく、それ以前に見た夢の内容も、何故か鮮明に思ひ出すことができる……。

黒耳と呼ばれた狐がどんな風に娘に出会い、どんな風に接していたか……どんな想いでいたのか……。

どうしてだろう？

起きたばかりだと言うのに、何故か頭だけは妙に冴えているようで、それまで見ていた夢と、これまで感じていたいくつかの妙な感じの一つ一つが俺の頭の中で綺麗につながり始めているのが分かる。

何と言つても、最初から感じていた誰かが俺に話を聞かせてくれたと言つるのは、確かにその通りだったのだ。

聞き覚えのある声だったのも当然だったろう。最初にそれが分からなかったのは、今日初めて夢の内容を思ひ出した（覚えていた）のだから。

真琴が何気なく口にした黒耳の名前。その時は確かに俺自身も引つかかっていたが、それも当然のことだったのかも知れない。

そもそも、真琴が『ものみの狐』のことを気にしたのも、ものすごく当たり前と言える

『薫風の丘』

かも知れない。

いや、もしかしたら俺があの本を手にしたことも、天野が本のことを知らなかったのも偶然じゃなかったのかも知れない。

はつきりとした理由はない。

だけど、俺は半ば確信しつつ、一つの結論を導き出した。もちろん、俺の頭に浮かんだ結論は、普通に考えてみればおかしな話で、それこそ悪い夢の続きみたいなものだろう。

それでも、俺にとってそれは夢でも何でもない、とても身近で現実的な話なのだ。

そうだ、ここでのんびりとしてる余裕なんてない。

行かなくては。

どこに？　と言う疑問なんて全然ない。だけど、明確な理由もない。

朝食とか学校をどうするのかなんてことより、俺の結論を確かめなくてはいけないのだ。

だから、行かなくては。

丘に——ものみの丘に。

そうと決めたら行動あるのみ……とは言うものの、秋子さんたちに説明のしようがないので、なるべく見つかからないようにこっそりと玄関に向かう。

だが、俺が静かに靴をはいて、いざ出ようかと言う時。

「あら？　こんなに早く出かけるの？」

それまで気配をまったく感じさせず、いきなり秋子さんが後ろにいた……。

「っ！」

我ながら大声を出さなかったのは、大したモノだと思う。内心はかなりビクビクしている。

たのだが、どうもそれは秋子さんに通じてはいないようだ。

「早く出るのだったら、朝ご飯も早く支度しますから…」

と、困ったように笑う秋子さん。

そりゃ確かにそうだ。俺だってホントに朝早い用事があつたら、昨日のうちに言っておく。が、今回ののはちょっと説明しにくい状況だったりするのだからどうしようもない。

「えー…と……」

駄目だ…。

いきなり秋子さんに声をかけられたおかげで、上手な言い訳なんてのが浮かんで来やしない…。

「どうかしたの？」

「いや、急な用事って言うか…何て言うか……」

一向に適当な言葉が出ないままでいると、ふと秋子さんが小さく笑った。

「祐一さんは先に出かけた、と名雪たちには言っておけばいいんですね？」

「あ……」

「大事な用なんでしょう？ だったら、急いだ方がいいですよ」

もともと細かいことにこだわらないと言ってしまったえば、確かに秋子さんはそんな人だ。

いや、もしかしたらすべてお見通しなのかも知れない…と言う計り知れない部分があるのも秋子さんだったりする…。

まあ、秋子さんが天然なのかそうでないのか、この際どっちでもいいとして俺は用事を優先させるだけしかない。

『薫風の丘』

「すみません」

短くそれだけ返して、俺は秋子さんに背を向けた。

「はい、行ってらっしゃい」

いつもとあまり変わらない秋子さんの言葉を聞きながら、俺は静かに外に出た。

早いと言っても早朝と言うほどでもない時間だったが、やっぱり人通りの少ない路地を俺は早足で歩いて行った。さすがにこんな時間に制服と言うのは珍しいかも知れないが、別に変と言うほどでもないはずだ。まあ、行き先が明らかに違うので、知ってる人が見れば変に思われるかも知れないけどな。

とにかく細かいことはあまり気にせずに、丘へと急いでみると、こんな時間にも関わらず先客がいた。

少し先の方で、丘を見下ろすように立っている人物の背中が見えた。

こんな時間にこんな場所にいることなんて、俺以上になさそうなのにそれは俺が確信した通りの人物だった。

家を出てからずっと早足で歩いてきたおかげですっかり荒くなった呼吸を整えるように、俺はゆっくりとその人物に近づいていった。

「早いですね」

俺が近づくと、俺に背を向けたまま、その人が告げる。それはもちろん聞き覚えのある……あの夢を語ってくれた声だ。

「ここまで走って来ることはしなかったですけどね」

「そうですか？」

『薫風の丘』

「ええ、早朝マラソンなんて健康的な趣味はなかったりするんで」

「そうおっしゃる割には、朝はよく走っているんじゃないですか？」

「そこまでお見通しですか…」

「当てずっぽうで言ったんですがねえ」

と、そこでようやく振り向いたのは、言うまでもなく高木隆太郎その人で、ここにいることについて、俺は何の疑問も抱いちゃいなかった。そもそも俺はこの人に会うために、こんな時間にこんな場所に来たのだから。

そんなの理屈じゃない。

理屈じゃないけど、それがごく当たり前で自然な成り行きだと思う。

「高木さんはこんなところまで散歩ですか？」

俺がわざとはぐらかすような言い方をしてみると、高木さんは笑って答えてくれる。

「ここは好きな場所ですからね」

本音を言うと、真っ向正面から高木さんに訊きたいことはある。でも、それを口にするのが野暮なことと思えて、俺も高木さんに合わせるように笑ってみせる。

「俺もですよ」

すると、高木さんは少しだけ間を置いた後、ゆっくりとうなずきながら言った。

「訊きたいですか？」

「え？」

いきなりの問いかけの意味が分からないまま俺が短く返すと、高木さんは真剣な表情で言葉を続ける。

『薫風の丘』

「黒耳と呼ばれた狐の話です」

その時、俺はそれまで持っていた確信を、より一層強く感じていた。間違いない高木さんは何もかも知っている、人物なのだ。

最初に会った時の態度は、高木さんの本当の姿ではなかったのだ。

「はい」

高木さんに向かってうなずきながら、俺は短くはつきりと答えた。

—\*—

黒耳は人々を憎んでいた。

無力な自分を憎んでいた。

故に、力を欲した。

人間など一なでで倒せるような、強い力を。

黒耳は問うた。

どうすればいいのか、と。

その問いに、丘を吹く風が答える。

我を捕まえたなら、力を与えようと。

風を捕まえること、それは絶対にできないことの喩えだった。できないことをせよ、と

風は言ったのだ。

だが、黒耳はあきらめなかった。



来る日も来る日も、走り回り、小高い丘から飛び上がり、風を捕まえようと躍起になっていた。

だが、どうすればいいのかわかっていたのではない。そもそも、そんなことができるはずもないのも承知の上だった。だが、風を追って走ることを止めなかった。自分にできることがそれしかなかったから。

やがて、仲間の狐たちも誰一人として黒耳のことを相手にしなくなった。それでも黒耳はあきらめなかった。

倒れるまで走り、時には大仰に転んだりもしたが、あきらめなかった。

自慢の足も、もはや満足に走れる状態ではなくなっていた。

でも、走り続けた。

ふさふさした毛並みもすっかり傷だらけになり、とても若い狐とは思えないほどにみすぼらしい状態だった。

それでも、跳び続けた。

どんなことがあっても、あきらめられるはずなどなかった。

そんな黒耳に風が問う。

何故お前はそんなになつてまで、無謀なことを試みるのか。何故そのような愚かな行動をするのか、と。

黒耳は答える。

“俺を愚かと言うか”

——然り。

『薫風の丘』

“ならば、愚者に何を問う”

——憎いか。

“憎い”

——何を憎むか。

“力のない己を”

——力を欲するか。

“欲しい”

——力を得て、お前は何とする。

“ただ復讐のみ”

——力だけを欲して、それでお前は満足か。

“力以外に何がいると言うのか”

——哀れな獣よ、お前は何を失うか。

“失うものなど、すでにありはしない”

——愚かで哀れな獣よ、それではお前に力を与えよう。自らが望んだ力と、自らが望まぬ

苦しみを受けるがいい。

—\*—

「それで：黒耳はどうなったんですか？」

「文字通りに力を手にしました。娘の復讐にと、大雨を降らせたり、作物を駄目にさせた

『薫風の丘』

り…とにかく村人を苦しめました。ですが、そんな風に暴れていた黒耳はある時を境に人に災いをもたらすのをやめたのです」

「どうして？」

「言い伝えでは、旅の僧に説得されたとか、あるいは旅の剣術使いに討ち滅ぼされたとなってますね」

「それは言い伝えにすぎませんよね」

「そうですね」

「どうしてそう言いきれるのか…なんてのは、まさに愚問だろう。」

高木さんが単に伝承をまとめただけの人物でしかなかったら、少なくとも今俺の目の前にいることはない。

高木さんはものみの丘の狐たちの力のことを知っている。どうしてそう言ったかということも、それで何が起きたのかと言うことも。

確証はないが、そう確信していた。

だから、あえて俺は口に出した。

「俺…ずっと考えてたことがあるんですよ。この丘の狐はどうして人と触れ合うことを…人の温もりを求めるのかって」

「それは、簡単なことですよ」

答えながら高木さんは小さく笑う。

「簡単？」

「ええ。黒耳は得た力をこの丘の狐たちにも、少しでも分けたいんです」

『薫風の丘』

「それがどうして？」

「黒耳自身の力はすごいのですが、他の狐たちの力はそれほど強くはない。だから…人の姿になるのにも大きな代償を払うことになってしまった」

「それって……」

「自らの命と、自らの記憶。それほどの代償を払ってまで、人になろうとする狐などいるはずがない、そう思っていたんです」

「何で……」

その話は間違いなく、真琴で経験した通りのものだった。しかし、いきなりそんな核心をつかれ、思わず言葉に詰まってしまった。真琴の正体をそれとなく天野から言われた時と同じように。

そして、高木さんはしばらく間を置いてから、俺に尋ねるのだった。

「黒耳が力を欲した理由は何でしょう？」

「復讐…じゃあなかったんですか？」

これまでの黒耳の話を思い出しながら、俺がそう答えると高木さんは一度だけ小さくうなずいた。

「ですね。でも、それはほんの一部にすぎない、逆恨みのようなものでしかないんです

よ

「じゃあ、本当の理由って……」

「一緒にいたかった…狐としてではなく、人として娘のそばにいたかった。それが一番の望みであつたのです」

「……」

俺は何も言えなかった。

今ここにいる高木隆太郎と言う人物が、どうしてそこまで黒耳のことを言えるのか、それが分かっていなかったから。こんなことを人に言っても、信じてはくれないだろう。でも、俺には分かっていた。

「だから、黒耳の力を少しとは言え受け継いでいる狐たちも、同様に人の温もりに憧れて、大きな代償を払っても会いたいと願うのです……」

高木さんの表情が苦笑いへと変わり、そのまま目を閉じてしまう。自分の過ちを回想するかのよう。

確かに高木さんの言う理由もあるかも知れない。でも、それだけで狐たちがそんな大きな代償を払うことができるのか……正直言って俺は違うと思った。そして、それを高木さんに言うのは間違いなく俺の役目だとも。

「それは違うんじゃないかって思いますよ、俺は」

俺の反論を受けて、高木さんは閉じていた目を開き、まっすぐに俺を見つめる。

「違う？」

「黒耳の力のせい……なんかじゃなくて、そうまでして会いたいと言う気持ちが狐にあったんだと思うし、たぶん……その相手の人間の方もそんな風に思っていたのかも知れないじゃないですか」

自分がうまく言えたかどうかはよく分からなかった。でも、慰めとかそんなつもりで言ったんじゃないのは本当だ。

『薫風の丘』

そんな俺の気持ち伝わったのかどうかとも、自信はなかったりするが、高木さんはまた目を閉じて、そっとつぶやくように言った。

「最初は子狐でしたね」

「え？」

「最初に大きな代償を払ったのは、昨日会ったような女の子でした」

何のことかすぐには分からなかったが、昨日会ったような女の子……と言われれば、納得が行く。

間違いない。

この人は黒耳なのだ。それが夢から得た結論であり、確証のない確信であり、事実だろう。

「ところで、黒耳はどうなつたんです？」

「村人にまぎれて人として暮らすようになりましたね。自分のせいで村人に丘の狐が苦しめられることのないように。そして、人の温もりに憧れて、大きな代償を払った狐を見守るために」

「高木さん……」

「何でしょう？」

一体どれだけの時間を過ごしてきたのか、どれだけのことがらを見続けているのか……なんてことは、俺には想像できやしない。今ここで「あなたは黒耳ですよね」なんてことも訊けやしない。だいいち、そんなことを訊く必要もないんだ。

「いえ……黒耳は辛くなかったのかなって……」

「それこそが黒耳が望まなかった苦しみですよ。しょうがないでしょう？」

まるで他人のことのように、高木さんは笑ってみせる。それがどれほどの意味を持つのか知ってるヤツにとっちゃ、到底笑える話じゃないのに。

「しょうがない…ですか」

「ええ、しょうがないです。それに…：狐たちにはもう一つ特別な力があるんです。これは説明するまでもないでしょうが、そうした力を呼び寄せることのできる人たちもいる…：それで十分です」

狐たちが持つもう一つの特別な力。その説明なんていらぬことだし、それで十分だと言ってくれるのなら…：俺にできるのは一つ。

「そうですか…：そりゃよかった」

そう言っ、ほんの少しだけ風景を滲ませながらも、笑うことだけだ。

そのまましばらく、俺と高木さんの間に言葉が交わされることがなかったが、高木さんがちらっと自分の腕時計を見た後、苦笑しながら言った。

「さて…と、ずいぶんと話し込んでしまいました。時間はいいんですか？」

俺自身は時計を持ってないので正確な時間までは分からなかったが、高木さんの表情と口振りから察するに、遅刻は決定だろう。まあ、それは最初から覚悟の上だったが、軽い冗談で返してみる。

「ここに黒耳がいたら、時間を戻してくれるように頼みたいくらいで」

「それは残念ですね」

高木さんは困ったように笑う。何もかも分かった上でのやり取りだから、俺も笑って答

える。

「いや、まったく」

「黒耳に時間を戻すことができたなら、それが一番よかったのかも知れないのですけどね。失ったものは戻らないですよね」

「あ……」

相変わらず高木さんは笑っているだけだったが、そこで言う失ったものが何を意味するのか分からないって言うほど、俺もバカじゃない。

「そう言うことですよ」

「すみません……」

「謝ることはないでしょう。あなたは失うことのないように……それだけです」

「ええ」

俺が短く答えると、高木さんは優しそうな笑みを浮かべて、何度もうなずいていた。

そして、別れ際に俺が、

「また、会えますか？」

と訊くと高木さんは、

「たぶん」

と言って、ただ笑うだけだった。

しかし、それがどう言う意味の笑いだったのか、俺は後で思い知った。と言うのも、俺以外の関係者みんなが、高木隆太郎と言う人物のことをすっかり忘れてしまったのだ。

名雪が知らないのは当然としても、出版社に問い合わせたはずの秋子さんも、実



『薫風の丘』

際に会ったはずの真琴も天野も、高木隆太郎のことを何も覚えてない……と言うより、まるで知らないと言う状態だった。

おまけに、あつたはずの高木宅もずっと前から空き地だったと言われるし、まさに狐につままれたようだった。

でも、俺が会ったのは夢でもないし、俺の作り話でもない、本当のことだ。

あの人のことだから、真琴に余計な詮索をさせないようにしたつもりなのかも知れないしな。

そして、高木さんと話してから数日後の朝食の時。

俺はふと思いついたことを、口にした。いや、それ自体はずっと考えていたことで、言い出す機会を悩んでいただけだったのだが。

「天気の良い日にでも、ものみの丘にみんなで行くか？」

「祐一がそんなこと言うなんて、何だか珍しいね」

「名雪はイヤなら留守番でも何でもしてくれ」

人がせっかくだと提案してるのに、そんな風に言われちゃあ身も蓋もないが、そんなことを名雪に言っても無駄と言うものだ。

「もちろんお母さんも一緒だよね」

「いいんですか？ 祐一さん……」

「もちろんですよ」

「それじゃ、お弁当を張り切って作らなくちゃいけませんね」

「楽しみにしています」

『薫風の丘』

「ねえねえ祐一、美汐ちゃんもいいかなあ？」

「もちろんだ」

天野は俺の構想では最初から頭数に入っている。

「でも、何でいきなりピクニックなの？」

「真琴はイヤか？」

「そんなこと言っていないわよう」

「ま、あれだ…要するに、お前の親父さんみたいな人と親戚のような人に挨拶に行くようなもんだな」

親父さんみたいな…ってのは黒耳のことで、あながちはずれでもないはずだ。

「祐一ってば頭がヘンになったんじゃない？ 真琴の親戚がそんなところにいるわけないでしょっ！」

「だから、みたいなのとて言ってるじゃないか」

「よく分かんないわよう、それじゃ…」

「ま、細かいことは気にすんな。丘に吹く風は何でも知ってるのさ」

「あうーっ、祐一…やっぱりヘンよお」

ヘンと言われようが、楽しみと言われようが、どっちでも構わない。

黒耳がどんな思いで長い時を過ごしてきたか…なんて、俺にはやっぱり想像できないし、それについて同情とか慰めなんて、俺がすることじゃない。だから、今の俺たちがどんな風になっているのかってことを、教えてやりたいだけなのだ。

そりゃあ、黒耳ならその程度のことはお見通しかも知れない。それでも、俺はあそこに

『薫風の丘』

行って、これでもかと言うくらいに見せてやりたいと思う。

それに、今は五月。

人になりたいって…一緒にいたいって願った狐たちの丘も、優しくてすがすがしい風が吹いているじゃないか。

黒耳と狐たちと人の、みんなの想いに溢れた風が。

『薫風の丘』

『薫風の丘』あとがき

真琴の本来の話（もともとのシリーズ）からすれば、今回の話はやや蛇足のような部分でもあるわけです（当初の予定では別の短編で黒耳の話を書くつもりでした）が、今の真琴たちと絡ませたくなったので、今回の物語になりました。

それにしても、我ながらこじつけみたいなきがするの…気のせいでしょうか？ まあ、自分ではこれでいいと思ってるんですが、もしかしたら言葉足らずかも知れないですね（風のこととか、天野のこととか）

二〇〇〇年八月二〇日 記

2000/08/20 初版 a s h

PDF書式変更:2016/05/18